

佐用町昆虫館、台風災害と復興の記録

平成 21 年（2009 年）台風 9 号水害による佐用町昆虫館の被災と復旧、復興に関する記録集

2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク

目次

ごあいさつ	1
佐用町昆虫館の概要	2
平成 21 年台風 9 号被害の概要	3
佐用町昆虫館の被害の概要	3
復旧経過の概要	6
災害に結ぶきずな－昆虫館復興顛末記－	10
復興義援金会計収支報告	20
協力者・支援者一覧	21
関連資料	
雑誌記事	24
新聞記事	27
2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク 規約	31
義援金募集チラシ	32

ごあいさつ

2009年8月9日に西日本を襲った台風9号の影響で、佐用町昆虫館は壊滅的な打撃を受けました。皮肉にも、当日午後に昆虫館と人と自然の博物館との間の連携協定書の調印式が行われ、これまでの協力関係をさらに発展させようとしたちょうどその日の夜の出来事でした。

日頃から昆虫館を応援している人たちや、ひとはくの関係者らが話し合っ
て、早急に昆虫館の復興を支援したいというネットワークを立ち上げました。
しかし、町全体が大きな被害を受けている佐用町に、昆虫館まで手当する
余裕があるはずがありません。復興支援ネットワークでは、昆虫館を応援
してくださる皆さんに、いっしょに復興をサポートしようと呼びかけさせて
いただきました。佐用町の不幸な状況はメディアを通じて大きく報道されて
いましたので、広範囲の人たちに理解されていました。日頃の昆虫館の活動
実績は自然を愛する広範囲の人たちの共感を得ておりました。そういう背景
に後押しされて、応援の輪は着実に広がり、昆虫館の復興が可能になりました。
その活動の経過や現状を、応援してくださった方がたに報告するため
に、このパンフレットをつくりました。

災害以来1年以上の月日が過ぎました。確かに残念な災害でした。しかし、
その災害を乗り越えて、佐用町が着実に復興の道を歩んでいるように、昆虫
館もすがたを整え、不幸な災害から学んだことを糧に加えて、今新しい歩み
を始めています。復興支援ネットワークとしての役割は一応終えられたと思
われ、この報告をもって解散することになります。

いうまでもありませんが、復興支援ネットワークの解散は、昆虫館の無視
のはじまりではありません。不幸な災害への緊急の対応が不要になっただけ
で、日常的な昆虫館との協働は、それぞれのつながりを通じてますます強い
連帯を育てていくことでしょう。この不幸な出来事を乗り越えて、昆虫館が
いっそう有意義な活動を展開することを期待し、その活動にいろんなかたち
で参画できる楽しみを未来に向けて描きながら、このネットワークの活動の
記録を皆さんにお届けする次第です。

佐用町昆虫館を通じての連帯がますます強く広く展開することを祈念いた
します。

2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク

呼びかけ人代表 岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館 館長）



佐用町昆虫館の概要

佐用町昆虫館は、兵庫県の西部、岡山県との県境近く佐用町船越の地にある、敷地面積 942 m²、述べ床面積 165 m²の小さな館である。

1971年に開館した「兵庫県・千種川グリーンライン昆虫館」(兵庫県昆虫館)は、財政難・人材難・施設の老朽化を理由に、2008年3月をもって廃止された。昆虫館廃止が決定していた2007年11月下旬、館廃止の報に接した竹田真木生・神戸大学大学院教授が、館の存続に動き出した。竹田教授の提案を受け、庵造(あんざこ)典章佐用町長は昆虫館存続を決断、1年の準備期間を経て、館の施設は県から町に無償譲渡され、新たに設立したNPO法人こどもとむしの会が指定管理者となり、町立の施設として再出発した。2009年4月のことであった。

佐用町昆虫館のキャッチコピーは「こどもとむしの秘密基地」とした。豊かな自然に囲まれた小さな館の特性を活かし、みんなで作って、来館者もスタッフもみんなで遊んでしまうようなイメージである。昆虫館の運営上の特徴は、大きく次の3点である。

1) ボランティアによる運営

NPO法人こどもとむしの会の会員が、交代で「一日館長」をつとめ、標本や生きた昆虫を持ち寄るなど、ボランティアで館を運営している。専従職員はいない。NPO法人こどもとむしの会の正会員は90名である(2010年10月現在)。

2) 季節開館、休日開館

昆虫の出現期に合わせた4月から10月の開館で、冬期は休館している。親子連れを主なターゲットとした土日祝日のみの休日開館で、平日は事前に要望のあった場合のみ、協議により開館する。開館日数は年間約70日で、一般的

な博物館類似施設の1/3から1/4である。開館していること自体がイベントであるともいえるだろう。なお、入館は無料である。

3) 対話を通したほんものたいけん

来館者は、開放的な対面式カウンターに配置された昆虫や小動物に、いつでも触れることができ、自由に読書やお絵描きなどができる。これらのたいけんは、スタッフとの対話によって、促進される。

1年の休館を経てこのように新しいスタイルで出発した佐用町昆虫館には、幼児や低学年児童を含む家族連れがたくさん訪れ、リピーターも増えていた。

2009年8月9日(日)、佐用町昆虫館は、兵庫県立人と自然の博物館との連携に関する協定書に調印した。8月9日午後、昆虫館にて調印式が行われたが、警報発令により、調印式直後に庵造町長は帰庁された。昆虫館が水害に見舞われたのは、おそらくその数時間後のことであった。



兵庫県立人と自然の博物館との連携に関する協定書調印式の様子
2009年8月9日 矢部正明撮影



水害前の佐用町昆虫館 2009年6月21日 八木剛撮影

平成 21 年台風 9 号被害の概要

平成 21 年 8 月 9 日午後 9 時、日本の南海上で熱帯低気圧から台風となった台風第 9 号により、兵庫県では大気の状態が非常に不安定となり、佐用町佐用では 1 時間に 89 ミリ、日降水量は 326.5 ミリを観測し、町の観測史上最大を記録する豪雨となった。これにより、死者 18 名、行方不明者 2 名の人的被害を始め、広範囲に及ぶ浸水、1,700 戸以上の家屋被害のほか、河川・道路・農地・農業用施設などに甚大な被害が発生した。

被害は佐用町の南部に大きかったが、町北部の昆虫館の位置する船越地域でも、南光自然観察村、瑠璃寺、モンキーパークをはじめ、民家数戸の被害、農地への被害があった。

佐用町昆虫館の被害の概要

敷地全体が、拳大から一抱えもある巨礫に覆われており、敷地境界は部分的に崩壊していた。特に、寺谷川の土石流の直撃を受けた敷地の北側では、土砂が厚く堆積し、1m 以上となっていた。以前は昆虫館敷地面より 2、3m 下方を流下していた寺谷川の河床は、敷地とほぼ同じ高さとなっていた。

敷地内の池はすべて土砂に埋没した。これらの池には館の上流から高低差を利用して寺谷川の水を引き入れていた

が、導水管は完全に破壊された。また、敷地境界の柵は多くが破壊され、シカ防除柵も、ほぼすべてが破壊された。

屋外倉庫を除いて建物の損傷はほとんどなく、チョウチョひらひらハウス（網室）は、数 cm から数 10cm の泥に埋もれたものの、構造に問題はなかった。

館の内部は、別棟となっているベビールーム、トイレも含め、泥水によって浸水（最大 2、30cm 程度）した。床の一部、実験台、カウンター、標本展示台等の木質部は汚損が激しく、排水後は全館的にカビの増殖が著しかった。床に置かれていた電化製品の多くは使用不能となった。展示資料、図書類は、一部、浸水による被害があった。昆虫標本は、倉庫に置かれていたものが一部浸水したが、壁面に展示されていた標本への浸水被害はなかった。

これら昆虫館の被害を 5 ページの表に整理した。



千種川本流の状況（「ひまわり館」付近。南光自然観察村への橋が崩落）
2009 年 8 月 10 日 近藤伸一撮影



寺谷川の状況（昆虫館の少し下流）
2009 年 8 月 10 日 近藤伸一撮影



寺谷川がオーバーフローし、川となった町道（正面奥が昆虫館）
2009 年 8 月 10 日 近藤伸一撮影



崩壊した昆虫館の敷地境界（館南東角。左の写真に写っているあたり）
2009 年 8 月 20 日 八木 剛撮影



崩壊した昆虫館の敷地境界（館南側） 2009年8月10日 近藤伸一 撮影



舗装がはがれた昆虫館前の町道 2009年8月10日 近藤伸一 撮影



昆虫館正面入口 2009年8月12日 高橋耕二 撮影



窓の高さまで土砂が堆積した館北西側。すぐ左が寺谷川 2009年8月10日 近藤伸一 撮影



土砂が堆積した「おにぎりパクパク広場」（館北側） 2009年8月10日 近藤伸一 撮影



館内スタディラボの床、カウンター下の状態 2009年8月15日 中瀬大地 撮影



浸水して泥田の様相となった「むしの宝箱」（標本展示室） 2009年8月15日 三木進 撮影



浸水による泥でコーティングされたトンボの標本（乾燥後） 2009年8月19日 相坂耕作 撮影

佐用町昆虫館 案内図



平成 21 年（2009 年）台風 9 号水害による佐用町昆虫館の被害の概要（位置は上図参照）

被害箇所	被害状況	復旧措置	
敷地全体	土砂流入 フェンス 導水管	昆虫館敷地内に 240 立米の土砂が堆積した。敷地北側（上流部）で厚く、1m 以上。 敷地境界の柵、寺谷川沿いのシカ防除柵がすべて崩壊した（延長 131m）。南側の敷地境界部分は崩落した。 館の上流から寺谷川の水を塩ビ導水管で館内の池、水路に導入していた（延長約 300m）。また、井戸水をポンプアップして配水していたが、それらが破損。	機械および人力により敷地から排除。廃土は佐用町が処分。流木を利用し花壇設置 敷地境界の柵、崩落した敷地は佐用町により復旧、シカ防除柵はネットによる暫定復旧 河川水については復旧を断念。井戸を復旧すると共に、新たに上水道を道入。
工作物	チョウチョひらひらハウス いもりクネクネ池 ほたるピカピカ池	細かな土砂が堆積、池は埋没 土砂に埋没 土砂に埋没、漏水	土砂を撤去。導水管の破損により、池の機能は断念 土砂を撤去し再整備。河川水配管の破損により、井戸水ポンプアップによる涵養に切り替え 土砂を撤去し再整備。井戸水による涵養に切り替え。ただし、漏水しており、今後の整備が必要
屋外倉庫	シャッターが破損し、引き戸も一部破損。内部には多量の土砂が流入し、カビが繁殖	シャッター引き戸を撤去し、倉庫としての機能は断念、広場への勝手口を設置。別途物置を購入	
館内	内壁 電気配線 準備室（標本庫・倉庫） むしの宝箱（標本展示室） トイレ ベビールーム スタディらぼ	全室の内壁（243m ² ）にカビ 一部不良 泥水による浸水、床のビーターイルが浮き上がり、内壁にカビ 泥水による浸水、下窓のガラス数枚にヒビ、標本展示台（3 台）木質部の汚損 泥水が流入し、床排水不良、内壁にカビ 泥水が流入、内壁にカビ、水道（井戸水）断水 床上浸水、実験台 2 台汚損、カウンター引き戸・同床板の汚損（吸湿およびカビ）、大型冷暖房装置（動力）浸水	殺菌剤噴霧、防カビ塗装。風通しを確保するため、窓を 2 カ所設置 復旧 2 室の仕切り壁を撤去し、内壁塗装。床はモルタルに。 内壁塗装。下窓ガラスをアクリル板に交換、会員による標本展示台の補修（側面合板の交換、塗装）、換気扇 2 台交換、エアコン設置。 排水管復旧、便器の一部、内部の手洗い設備を撤去、内壁塗装、床モルタル改装 床を張り替え、内壁塗装、水道復旧、事務机・おむつ交換台廃棄、網戸設置 実験台 2 台を廃棄し、あらたに可動テーブルを導入。カウンター引き戸、床板を廃棄し床板を張替え（カビだらけ）。大型冷暖房装置を廃棄し、エアコンを新設、冷蔵庫の廃棄および新設、換気扇 2 台交換。
物品類	その他の主な物品 水損図書（詳細不明） 館内掲示物 展示標本	スチール戸棚 2 台（腐食）、ストーブ、発電機、掃除機、実体顕微鏡、予備標本箱 鑑図図書類の浸水、吸湿 一部水損、吸湿 一部水損、吸湿	廃棄とし、新品を購入 会員が持ち帰り、手作業により乾燥 廃棄とし、新規作成 一部を廃棄、会員が手分けして自宅に持ち帰り乾燥

復旧経過の概要

1. 情報の把握と共有 災害後 1、2 日間

2009年8月10日午前、佐用町で大きな水害のあったことが判明し、昆虫館のある船越地域も少なからず被害が想定されることから、理事長、副理事長、事務局で検討し、当日正午、理事長と3人の副理事長で「佐用町昆虫館災害対策本部」を組織した。以後、昆虫館運営支援事業担当の三木 進副理事長が中心となって、情報の集約および周知、復旧作業を指揮することとなった。

当日15時頃、宍粟市千種町在住の会員によって、昆虫館付近の被害状況が判明、16時頃、近藤伸一副理事長が昆虫館に到達、館の敷地および周辺の被災状況を把握した。さらに夕刻、相坂耕作副理事長が館内に入り、浸水の状況を確認。これらの情報をメーリングリストで配信し、被害状況を共有した。

翌8月11日も会員が昆虫館を訪れ、状況を把握するとともに、一部の標本の持ち出しおよび近隣民家の復旧支援に当たった。夜になって、佐用町教育委員会の担当課と連絡がとれ、当面休館とする旨を確認し、ウェブサイト上にも被害状況と当面休館の告知を行った。なお、佐用町昆虫館は土日祝日のみの開館のため、この間は休館であり、利用者等からの問合せは特になかった。

役員間、正会員間の通信連絡は日常的に電子メール（メーリングリスト）を用いており、効率的な情報共有が行われた。

2. 応急措置と近隣支援 3日目～1週間後

被害状況が概ね判明した8月12日に復旧作業が本格的にスタートし、15日にかけて、会員および関係者述べ31名が昆虫館に入った。

復旧には相当な経費を要することが察せられたが、再開の有無にかかわらず、当面の復旧作業に異を唱えるものはなかった。

昆虫館の応急措置として、標本および図書の搬出、昆虫や魚類等生体の搬出ないし放流が行われた。つぎに、建物

の入口も土砂に覆われていたため、まずこれを排除し、館内の泥水を排水するための水路が掘られた。以後、しばらくは敷地を覆う土石、館内の泥の排除が最大の作業となった。

地元自治会長らに昆虫館の被害状況を報告するとともに、復旧作業について相談し、昆虫館応急措置ののちは、近隣民家の支援に力を割くこととした。ほぼ一週間にわたり、支援活動が行われた。

佐用町と佐用町社会福祉協議会は、8月10日に「佐用町災害ボランティアセンター」を設置した（本部：南光地域福祉センター内）が、昆虫館としては、ボランティアセンターとの連絡は行わなかった。これは、住民生活が復旧していない中で昆虫館の支援要請をすべきでないこと、関係者のネットワークによる支援活動によって、ボランティア派遣要請する必要がなかったことによるものである。会員の中には、ボランティアセンターを通して被災地の復旧支援に当たった者もいた。

3. 救援隊によるいっせい作業 1週間後～1ヶ月後

住民生活の復旧が一段落の兆しとなってきた頃、関係者のネットワークおよび報道を見ての支援申し出があり、こどもとむしの会との合同作業により、一気に復旧がはかどった。

こどもとむしの会会員も属している千種川圏域清流づくり委員会は、関係者に呼びかけ、8月23日、合同救援隊を組織した。滋賀県庁からも応援があり、53名の参加があり、近隣民家の復旧も含むいくつかの部隊に分かれ、人力による廃土作業を行った。

高野山真言宗播磨青年教師会からは、地域の復旧支援が一段落したことで、地元自治会長を通して昆虫館支援の申し入れがあった。8月25日、26日の2日間にわたり、延べ50人以上が、ミニコンボも投入し、敷地の南半分の土砂の多くを排除くださった。

姫路造園建設業協会は、新聞やテレビの報道を見て、未だ土砂に覆われた昆虫館への支援を決定し、9月26、27



近隣民家の復旧を支援 2009年8月13日 近藤伸一 撮影



排水路の掘削、館内の排水 2009年8月15日 三木進 撮影

日の2日間、延べ20名以上が重機も駆使して廃土作業をしてくださった。この段階で、厚く堆積していた敷地内の土砂はほぼ排除され、再開の兆しを感じられた。

4. 義援金の募集 1ヶ月後～

佐用町の財政規模は小さく、これまでの経緯からも、昆虫館の復旧が確実になされるかどうかは、不透明な情勢であった。そのような中、館の再開を確実なものとするため、昆虫館独自で義援金の募集を行うこととした。

8月20日、連携に関する協定を締結している兵庫県立人と自然の博物館を事務局とする「2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク」を組織し、受け入れ口座の開設を行うとともに、9月3日、全国の博物館や関係者に呼びかけ賛同者募集を開始した。賛同者は90人(団体)を超え、チラシ2万部の提供を経て、9月20日頃から実際の義援金募集を開始した。10月1日からは人と自然の博物館で「がんばれ佐用町展」を開催した。

住民生活の復旧に目処が立った9月1日、佐用町長から「創造的復興」とのメッセージが発せられた。昆虫館独自の義援金募集は、住民生活の復旧と町議会の日程を考慮して決定した。

以後、会員および関係者の協力により、義援金は、2,098,133円となり、館の復旧復興に大きく貢献した。

5. 再開の決定、復旧工事 2ヶ月後～

佐用町議会は、10月6日、昆虫館の復旧を含む災害復旧予算を可決し、昆虫館再開の方針が事実上決定した。水害以前の昆虫館の活動、復旧作業に従事する会員らの努力により、館の復旧について議会や地元の賛同を得られたものと思われた。

予算可決を受け、10月19日、佐用町の担当者とともに町の会役員らが昆虫館の現場を検分し、復旧工事の方針、優先順位を確認した。

佐用町は、被災した昆虫館の応急措置として、500万円の予算を投入し、ほぼ2ヶ月の工期で、昆虫館から排出された土砂の廃棄、毀損物品の廃棄、崩壊した敷地の復旧、フェンスの設置、屋外倉庫の撤去等の工事を行った。また、別途上水道の整備を行った。

町予算で不足する分について、義援金を用いた追加工事を発注し、館内の塗装、トイレの改修、エアコンの設置等を行った。復旧工事には地元の建設業者があたり、義援金を用いた追加工事、細かな設計変更にも快く応じていただいた。

工事が佳境となる1月から2月中旬は、昆虫館での作業は小休止とし、工事を見守りつつ、創造的復興に向けての計画づくりを行った。



姫路造園建設業協会による支援 2009年9月27日 三木進撮影



姫路造園建設業協会との合同作業 2009年9月27日 三木進撮影



廃棄された電化製品等 2009年8月25日 三木進撮影



幼稚園での「いどうこんちゅうかん」 2009年10月22日 八木剛撮影

6. いどうこんちゅうかん

水害によって休館を余儀なくされたが、その間も、町内のこどもたちに提供できることを考え、幼稚園・保育園へ出向いての「いどうこんちゅうかん」、小学校での「出前昆虫教室」を実施し、好評を得た。

7. 再開に向けて、きめ細かな手作業 1ヶ月後～

重機の支援による土砂排除が行われたのち、10月から年内にかけては、ほぼ毎週日曜日を定例の活動日とし、引き続き人力による土砂排除、敷地内および館内の整備作業が続いた。

浸水による細かな泥は館内の隅々にまで浸透しており、清掃作業には多くの労力を要した。新規製作を断念した標

本展示台は、会員が手作業で補修を行った。

いったん土砂に覆われた敷地は荒涼たる様相で、旧兵庫県昆虫館の時代から受け継がれてきた植物を復活させるため、花壇づくりなどの作業が続けられた。3月14日には三田ロータリークラブ会員10人が支援に来てくださり、植栽等の作業がはかどった。

2月6日、昆虫館の再開日を2010年4月3日（土）とすることを決定し、2月8日、ウェブサイトでの告知を開始した。

水害の日から236日目、佐用町昆虫館は再開した。

この間の主な作業、義援金等の推移を、次ページの図にまとめた。



流木を使った花壇の整備 2009年10月25日 中瀬大地 撮影



汚損した実験台の撤去 2009年11月22日 八木 剛 撮影



小雪の舞う中、高圧洗浄機での清掃作業 2009年12月20日 中瀬大地 撮影



標本展示台の補修 2010年3月7日 八木 剛 撮影



昆虫館の再開 2010年4月4日 八木 剛 撮影



昆虫館の再開 2010年4月4日 八木 剛 撮影

主なできごと

- 9/17 NPO 法人こどもとむしの会役員会：復興方針確認、4月再開の目標設定
- 8/10 未明 災害発生
- 10/6 町災害復旧予算可決（被災昆虫館の応急措置）
- 8/12 当面の間休館の告知
- 10/19 昆虫館にて復旧工事についての協議。優先順位確認
- 8/25 復興支援ネットワーク設立
- 10/21 幼稚園・保育園へのいどうこんちゅうかん開始
- 9/3 復興支援ネットワーク賛同者募集開始
- 11/19 三河地区自治会長会で報告、小学校への出前昆虫教室開始
- 9/24 佐用町昆虫館復興義援金告知開始
- 10/1～11/23 「がんばれ佐用町」展（人と自然の博物館）
- 2/24 義援金による追加工事発注
- 2/6 むしの会役員会：4月3日再開を決定、告知開始
- 3/8 標本展示呼びかけ開始
- 4/3 開館

昆虫館での主な作業

情報収集・応急措置

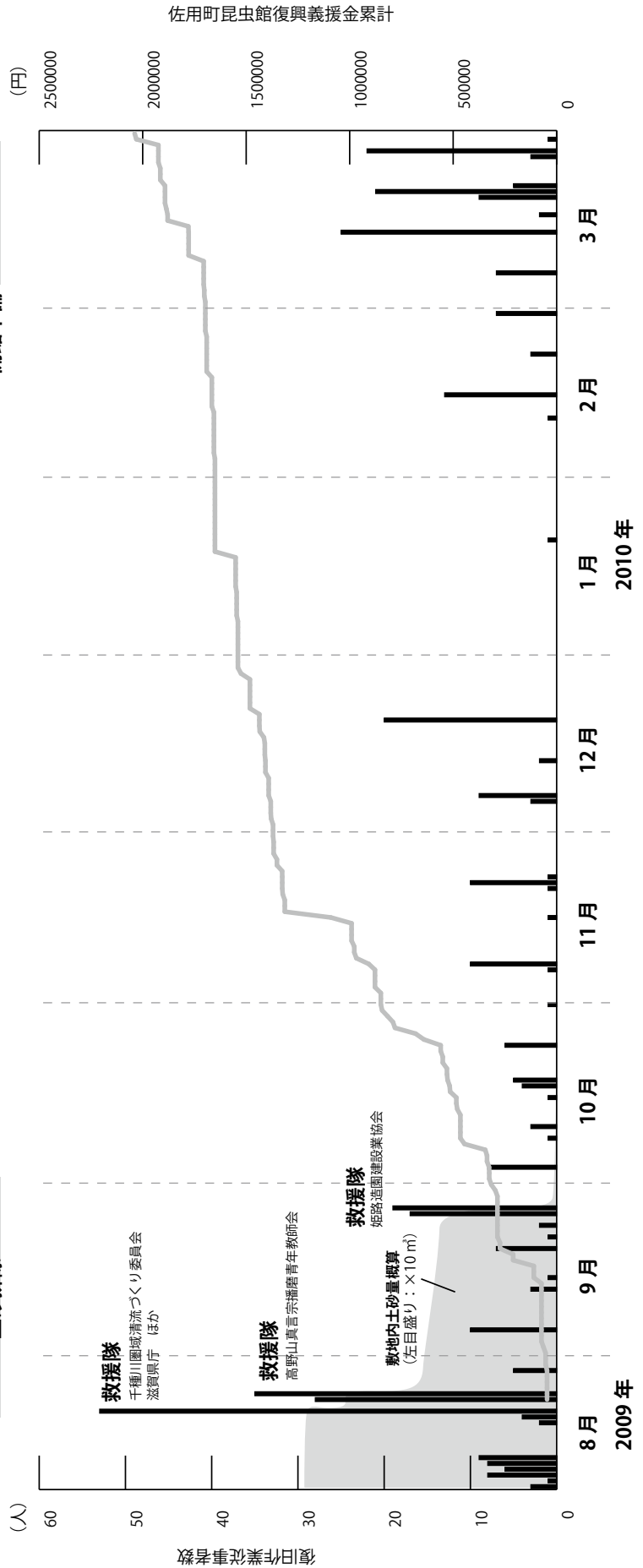
近隣支援

土砂排除

園内・館内整備

復旧工事

開館準備



2009年台風9号水害における佐用町昆虫館での復旧作業への従事者数、佐用町昆虫館復興義援金の推移

災害に結ぶきずな —昆虫館復興顛末記—

晴れやかな一日だった。2009年8月9日は、「佐用町昆虫館」と「兵庫県立人と自然の博物館」（以下、ひとはく）が“姉妹館”として連携強化を誓い合った日であった。庵道典章町長の立ち会いの下、昆虫館を運営するNPO法人こどもとむしの会（以下、むしの会）の内藤親彦理事長とひとはくの中瀬勲・副館長が固く握手を交わした。思い起こせば2008年3月末の廃館から、再開へと丸一年、ほこりとカビに覆われた、おびただしい備品の整理に奔走した会員達の努力が実り、小さな館が、その方向性において公の機関に認められた瞬間であった。ところが、事態は急変する。雨足が強まり、午後2時15分、佐用町を含む播磨北西部に大雨・洪水警報が発令された。同4時に何とか無事、閉館し、集まった会員たちも、同6時半までには家路に就いた。（本文敬称略）

急変！

その夜、時間雨量60~90mmという集中豪雨が襲った。長年、昆虫館の近くに住み、百葉箱を使って気象観測を続けてきた83歳になる内海功一前館長にとっても経験のない、未曾有の豪雨だった。瞬く間に雨量計が溢れた。「1時間に100mmほどの雨が降った」という。

深夜、兵庫県で防災を担当し、さまざまな災害に接してきた、むしの会副理事長の近藤伸一は、同じく副理事長の三木進に電話を入れた。次々と入る佐用の異常事態の報に、居ても立っても居られなかったのだ。「佐用町に豪雨が、町内の会員が心配です」。三木は「昆虫館が危ない」と叫んだ。新聞記者として、阪神淡路大震災の前から防災を担当してきただけに、上流部に放置された倒木や、伐採されたままの山肌が気がかりだった。

情報収集

動きは早かった。事務局を預かるひとはくの八木剛主任研究員は10日未明、三木に情報収集を求め、続いて、会の災害対策本部の設置を要請した。内藤理事長と3副理事、事務局で災害対策本部を設け、早朝から電話とメールによる被害状況の把握に励んだ。

10日午前9時26分、理事に向け速報を流した。近藤による「佐用町昆虫館災害状況」だった。

昨日からの大雨で昆虫館の状況が気になるところです。現在までに収集できた情報をお知らせします。

- 1 中国道が福崎―山崎間通行止め
- 2 三木さんからの情報

8時前に内海先生、区長さんに電話するが通じない。避難されているのではないかと▽千種町の清水さんによると、被害が大きく道路は各地で通行止めではないかとのこと。

- 3 瑠璃寺に電話（8時過ぎ）

ものすごい雨であった。瑠璃寺の建物自体は大丈夫。瑠璃寺周辺にある3本の橋のうち2本が被災した（どの位置のことかが分かりませんでした）。

- 4 これ以外の情報は、TVニュースだけです、昆虫館の位

置は谷の出口で、谷川に接して建っている、一番被災しやすい場所です。昆虫館までの道路は千種川、寺谷川の土手に当たる部分なので、川が増水すれば通行できなくなり、また災害を受けやすいといえます。

佐用町役場は建物自体が浸水し、多くの被害があり、職員は走り回っているはずなので、昆虫館の様子を聞くことは遠慮したいと思います。

内藤理事長と電話協議した結果です。

電話などから昆虫館周辺はかなりの被害があったものと思われる▽昆虫館までの、道路通行事情が不明である▽現地にたどり着いても危険であり、今できることはない▽もう少し状況が明らかになるまで待機する。

「災害速報」で実況

午後3時24分、全会員に「昆虫館災害速報1」を流した。

正会員の皆様

TV、新聞等でも既報の通り、佐用町は過去最大級の災害に見舞われております。佐用川の氾濫により、町役場自体が1mもの床上浸水となっております。すでに亡くなられた方があり、行方不明の方も多数おられます。私たちの昆虫館も、大打撃を受けたようです。

地元の消防団等によりますと、

- 1) 瑠璃寺や昆虫館のある谷から大量の土砂、樹木が流出。
- 2) 内海先生宅1階に流入。ご家族3人は船越公民館に避難し無事（※実際は自宅に居られた）。
- 3) 昆虫館周辺には、土砂と樹木が流入している。館、及び内部の状況は不明。
- 4) 瑠璃寺は、人的被害はないが、宿坊の前の橋、3つのうち2つが流失。孤立。（瑠璃寺の奥さんから八木先生へのメール）。
- 5) 船越地区の田畑は冠水し、木や草などのゴミで被害大、とのこと。現在、相坂副理事が、館長を務める「赤松の郷昆虫文化館」の被害状況の確認に併せ、南光、三河方面の情報収集に当たっていますが、上月の大きな橋が流され、さらに、上郡から北へは道路が寸断されており、正確な情報は分かりません。

元町の昆虫展を、確実に成功させる一方で館の復興に向けた取り組みが必要となります。皆様方の大切な標本を預かっている館ですが、現段階では被害状況は分かっています。

標本類や展示品の救出、館周辺の整理などの作業、地元や被災会員への支援などの行動を起こさなければならなくなる可能性もでてきました。注目下さい。また、情報がありましたら、連絡下さい。

ここまで書いた段階で、千種町の会員、清水兼男氏（元神戸新聞記者）から連絡あり。

- 1) 午後3時10分、昆虫館近くまで来たが、山門と館の間の道路が川になっており、一部はえぐられ近づけない。消防団員が警戒に当たっており、これ以上は進めない。水は、館の西側、通常の川筋をえぐり、館南側で左に蛇行、山門近くまで流れ、再び流下した模様。

- 2) 昆虫館の建物は南側正面が普段と変わらず、館のあちこちに流木がひっかかっている。

- 3) 館への道路上には大きな石があり、車は全く通れない。
- 4) 内海先生宅は、水は被っているが、建物自体の損傷は少ない模様。

清水氏は自宅でも地域でも被害が出ているのに、昆虫館まで危険を冒して確認作業に当たってください多謝。ということで、標本室のある北側の状況は、なお不明です。

（以上、文責三木）

復旧を通して次々と速報が出された。リタイヤ組の三木が基地局となり、携帯電話で状況を聞き、それを直ぐメールで流した。

館内へ

一方、近藤、相坂の両副理事長が、但馬と姫路から佐用へ向かった。昆虫館は1mを超える土砂に埋まっていることが分かった。夕方、相坂が懐中電灯を手に中に入った。展示標本類は無事、壁にかかっていた。昆虫に関する民俗資料の収集家である相坂は、誰よりも展示品や標本が気がかりだった。会員から預かった標本類が無事だったことが、以後の活動を少なからず勇気づける。

始動

翌11日、7月に入会したばかりの齋藤泰彦は、会社を休んで宝塚から単独で現地入りした。阪神淡路大震災で「お世話になったから」という。大量の土砂が流入した内海前館長宅の泥出しに、ひとりで励んだ。

12日は、午前7時に地元、上郡の横山正が館内に。展示していた千種川水系の魚類を水槽から回収した。上、中、下流の魚を、それぞれ元の生息域に放してから出勤した。小さな命へのいたわりであった。やがて連日出動の齋藤に、老舗眼鏡店の3代目山本勝也が合流。山本も震災に遭っていた。自宅兼店舗が全壊し、山陽電車の線路上に倒れ込んだ。復興への長い道のりを歩んできたひとりだった。三木は、地元自治会長らを訪ね、地域の被災状況を把握した上で昆虫館へ。

まず、上流部では山腹が各地で崩壊し、基盤岩が露出。ここから土砂や樹木が流下していた。倒木どころか生木を、土壌もろとも剥ぎ取っていた。想像を絶する集中豪雨だった。

館の被災状況も明らかになる。館の南側に上流から流れてきた船越杉の大木が2本横たわっていた。直径60-70cm、長さは10mを超える。片方を民家の壁に、もう片方をカエデの大木に引っ掛け、川をまたぐ格好で止まっていた。そこに大量の流木が引っ掛かり、土砂が溜まり、ダムとなった。流路を完全に塞いだ。

やがて濁流はその上を越えて、川筋を変え、下流部の民家5戸を直撃、床さまで土砂を堆積させた。ダムの背後となった館、園庭は、いわゆる「ポケット」となって岩や土砂が堆積、



流木で出来たダム

一面の氾濫原に変わり果てた。

標本展示室の壁の外は、高さ1.5mまで土砂に埋まり、窓枠の上、数cmの所でギリギリ止まっていた。

床上数cmのところにも小窓が10カ所ほどあったが、内側からUVカットフィルムを貼っていたのが幸いしたのか、こちらも割れることなく土砂の流入を防いでいた。館内は一時20cmほど浸水したが、2日経ち、泥水が数cm溜まっているだけだった。奇跡だった。もし、ガラスが割れ、土砂が流入していたなら、そこから破壊が進み、倒壊の危険性すらあった。

まず標本箱を南側のラボ内に持ち出した。足は泥水の中なので、電気は使えない。懐中電灯を頼りに、真っ暗な室内を一步一步、進んだ。70箱近くを運び出した。すでに一部で標本の敵、カビが発生していた。持ち込んだ新聞紙で湿気を防ぐのが、やっとだった。

シャベルがすべてだった

大阪のNPO法人シニア自然大学校(以下、シニア大)・昆虫科のリーダーで、当会の理事でもある高橋耕二、岡本俊治、金子留美子のトリオも館に。大切な標本箱をひとまず持ち出すと、次は近隣の救援に当たった。「虫より、地域の暮らし」である。幸い館には、一輪車などの道具が揃っていた。シャベルを手に、畳の上に10cm以上積もった泥や石をかき出す。それを一輪車で運ぶ。何時間もかけ、やっと終わると、重い敷物を除け、畳を上げ、床板をはずす。一面に、さらに厄介な石を大量に含んだ泥の層が広がる。下に行くほど重いのだ。



土砂が窓枠を超えた



新聞紙が、何かと役立った



むこう向き、かがんでいるのが大江君（内藤理事長撮影）

深さは30cm以上あった。昆虫館の常連で「り坊」と呼ばれる、瑠璃寺の二男、小学校3年生（当時）の大江峻弘君が大人顔負けの活躍をし、皆を驚かせた。

休憩を兼ね、氾濫した寺谷川で涼を取った。岩が露出する急流も、今は3mほど河床が上がり、何とも穏やかなせせらぎであった。

館の周囲を埋め尽くす200㎡もの土砂、それも大きな岩を含んだ圧倒的な砂礫に、到底手が出せなかった。

ところが、立ち向かう人がいた。金子とトンボの権威・高砂の東輝弥だった。玄関周りの土砂を掘り始めた。三木は手伝わなかった。土砂を人の手で除けるなど、現実的ではないと考えたからだ。

だが、2人のシャベルが始めの一步となった。次に来た人が後に続いた。県の埋蔵文化財調査が専門の久保弘幸や、近藤若手のカミキリ屋・岡田浩資ら。流入した土砂に大型のバールを何度も打ち込み、シャベルを立てた。それまでシャベルの刃を受け付けなかった洪水砂が緩んだ。軽々とすくっては一輪車に。学生時代、京都の山中で「白川砂」を掘るアルバイトをしていた三木だが、呆気に取られた。日々、知恵と肉体を使っている人間の實力だった。

後日、金子に、どうして、あの土砂に手がつけられたのかと聞いた。子どもの頃、親に「玄関だけは、いつもきれいに」と、教えられたという。

玄関からの排水路が来ると、館内に溜まっていた泥水の排除に掛かった。久保が持ち込んだ「てみ」や、雪掻きシャベルが役に立った。3人が横に並び、一気に押し出す。1波、2波と津波のように掻き出した。

一方、水に浸かった高額な図鑑類は、久保の指導で手分けして自宅に持ち帰り、1頁ずつ丁寧に剥がしては、新聞紙を挟んで乾かした。

もう一つの現場

当時、むしの会には、もう一つの重要な現場があった。8月13日（木）から25日（火）まで、神戸市中央区にある学校厚生会のギャラリー・アートホール神戸で「神戸元町・夏の昆虫館」の開催が決まっていた。佐用町昆虫館で復旧作

業が始まった日は、元町の搬入日でもあった。計画段階から、リードしてきた八木や、貴重な収集品を展示した相坂、当会会員でひとはく子ども達を結ぶ、連携活動グループ「るんるんぷらざ」を主宰する清水文美、小西真弓、そして神戸や大阪の会員、大学生達は、元町の成功に全力を挙げた。一日が終わると、元町と佐用のそれぞれの活動がメールで報告され、多くの写真と共に、会のブログに上がった。

それは互いを励まし、支え合った。元町には、多い日は、300人を超す子ども達がやってくる。タガメやクワガタなど生きた虫に触れてもらい、命の豊かさを、掛け替えのなさを、一人一人に伝えた。朝から夕方まで、一日が終わると、どっと疲れた。佐用は、重労働ではあったが、無理はせず、2時間作業すると、半時間休んだ。そこには、疲れを癒す、自然があった。

一人一人の力

佐用の最初の6日間は、午前中は昆虫館での作業、午後は地域に。そんな日が続いた。会には、大学生、院生、それに30、40歳代の社会人もおり、彼ら若い力が、精根尽きるまで石を抱え、土砂と闘った。大学生らは、ひとはくの八木が指導してきた昆虫好きの学生グループ「テネラル」のメンバーである。院生では神戸大の安岡拓郎、藤原淳一、兵庫県立大の山下大輔、学生では大阪工大の中瀬大地。専門学校生の清水一陽もいた。

もちろん熟年組も頑張った。理事長の内藤はハバチの研究者で、名誉教授になっていたが、夫婦揃って率先して作業を続けた。ミツバチの研究者として知られるひとはくの大谷剛は、夜間に八木とともに、昆虫館で飼っていたミツバチの巣箱を2つ救出し、近藤の待つ兵庫県立三木山森林公園に運んだ。雨中の救出作戦だった。

近藤らと鉢伏山系で絶滅危惧種の蝶類、ウスイロヒョウモンモドキの保護活動をしている奥村達夫は、早くから救援に従事。電気工事の設計施工が専門の友人・富永達三を伴って、一緒に回路の絶縁状況をチェックしたり、井戸のポンプを稼働させたりした。館に明かりが戻った。何ともいえない喜びであった。

事務局長で神戸大学大学院教授の竹田真木生は、佐用町内の民家をセカンドハウスにしていた。「どんなに小さくても昆虫館は大切だ」と、館の継続を訴え、八木と共にNPO設立に漕ぎ着けた張本人である。ここでも直ぐに行動を起こした。家族4人で町中心部の被災地に出向き、泥をかいた。

ひとはくの服部保研究部長は流木調査に訪れ、近藤が災害の実態を説明した。後に県による集計では、流木の2割が2004年の台風による風倒木だった。

正会員でひとはくの研究員、藤本真里は13日に、町内で被害状況の調査に参加した。以前から、三河地区町づくり協議会の活動をサポートしており、地域と昆虫館を結ぶ、側面支援となった。

報道機関も早かった。朝日新聞記者で正会員でもある茂山憲史は、取材を兼ね何度も激励に訪れ、神戸新聞の地元記者も取材。災害以前から昆虫館の立ち上げを報道していたテレ

び朝日の室謙太郎ディレクターもクルーと館に。こうした報道が後に、佐用町昆虫館の存在を広く知らしめ、復興には欠かせないものとなる。

助っ人が現れた

むしの会の会員は、以前から、さまざまな研究、保護活動に携わっている。横山もその一人。水を通した環境保護、調査団体「千種川圏域清流づくり委員会」(以下、清流づくり委)の中心メンバーでもある。自宅が被災していたが昆虫館の復旧に、清流づくり委としても協力しようと、「合同での作業」を申し出た。NPOの会員らに呼びかけたところ、それぞれが、所属している団体の仲間を連れて、昆虫館の復旧に当たることになった。ひとはくの若手「テネラル」、シニア大の面々、神戸大学の教員に県職員などである。

そして、清流づくり委とのつながりで滋賀県の土木交通部の20、30歳代の14人が車を連らね、応援に駆けつけてくれた。嘉田由紀子知事が、防災担当の若手有志の活動を見守ってくれたのだ。知事自身、研究者時代には、琵琶湖と暮らしの関わりや水害の調査もされてきた。こうして「第一次合同救援隊」が組まれた。

8月23日(日)、快晴。午前7時前、昆虫館に一番乗りしたのは、週末に動植物を撮影し続けている刈田悟史。岡田、久保、山本と共に、社会人組一二を争うスタミナの持ち主だ。最初に集まった人々は、昆虫館前に流入した杉の大木を一カ所に集め、駐車スペースを確保した。コロヤテコの応用といった基本的な知識が役立った。

事前に、作業の分担と各責任者を決めて、メールで流しておいたので、誰もが到着次第、自分の持ち場に向かった。当日朝に、新たな要請もあり、一部変更して5班編成とした。

まず、精鋭部隊十数人を上月の民家の復旧に送り出した。災害の現状を知ってもらおうと、滋賀県のグループの半数も投入した。

残った数十人は「昆虫館内部の泥出し」「網舎内の泥出し」「昆虫館入り口付近の土砂上げ兼土嚢づくり」「民家の復旧」の4班に分かれた。リーダーは、近藤、横山、シニア大昆虫科の代表・芳川雅美に、滋賀県庁グループの代表・瀧健太郎らだった。各班に連絡要員を1人配置し、応援要請や作業の進み具合などを随時、三木に知らせ、情報を集約、また共有した。



泥を洗い流して、館内を洗浄

それぞれの持ち場

館内は、シニア大の齋藤隆代表理事ら同大のメンバーが中心。使えなくなった電化製品などを運び出し、バケツとホースで泥を洗い流した。最後に兵庫県内の各河川で活動する人達による「兵庫の川サミット連絡会」からの寄付で購入した高圧洗浄機が活躍した。シニア大の芳川と金子は、後に詳細な活動報告をまとめている。

2004年秋にも水害を経験している横山によると、被災後は、直ちに水に浸かった木製品をすべて捨て、高圧洗浄機で壁や床を洗い、石灰を撒いて乾かすのが一番と言う。それに従った。

網舎は、教室ほどの広さがある。粒子の細かな泥が20-60cmも積もっていた。中央の池は埋まり、その場所さえ定かでなかった。泥の中でコイが死んでいた。水を含んだ泥は、実に重い。多くは初対面にも関わらず、笑顔できつい作業を続けた。

館入り口付近などの土砂は、建物の際から60cmほどの部分を掘り上げ、土嚢に詰める。それを積んで、再流入を防いだ。

滋賀県のメンバーには、若い女性4人がいた。彼女らがテネラルの学生たちに、土嚢への土の入れ方、口ひもの縛り方、そして積み方を指導した。「難しい」「おっ、土嚢検定1級合格や」などの元気な声がわきあがった。力がぶつかる現場だったが、どこか、ほほえましい光景であった。神戸大学の前藤薫准教授(現教授)らの姿もあった。激務を、いつも静かに果たした。

近隣の民家には、こちらも滋賀県土木交通部の若手をお願いした。万一、滋賀で災害があった場合に、より役立つと考えたからだ。ショベルを頼りに、わずか数人だけで、猛スピードで土砂を排除した。

滋賀の女性の中には、災害現場を視察し、被災者からの聞き取りを専門にする職員がいた。かつて頻繁に洪水に悩まされた「湖国」ならではの部隊編成だった。



泥に足を取られながらの網舎の作業



女性職員の指示に、学生達も懸命



大変な作業だったが、ホッと一息



狭い場所でも何のその。滋賀県パワーを見せた

兵庫県の職員も、名乗ることもなく、ただ黙々と作業にあたった。千種川の管理的立場にあった、前上郡土木事務所の課長らであった。

彼らには大役があった。園庭にあるはずの希少植物・ハリマイノデの救出である。船越山で見つかったシダの仲間、内海前館長にちなみ「ウツミイ」の学名(種名)を持つ。山中の株はシカの食害などで跡形もない。唯一、内海が移植した、ひと株のみが知られる幻の植物だった。

生えていたのは北西部分。1m近い厚い土を被っていた。場所を特定し、シダ植物の権威であるひとはくの鈴木武の指導の下、上部の土砂を少しずつ取り除いていった。やがて、枯れた葉先が見つかった。さらに、その下を掘ると、黄緑の部分が顔をのぞかせた。土砂に埋まって2週間。「生きていますよ」、鈴木言葉に歓声が続いた。周囲に土嚢を積み、すり鉢状にして保護した。

ひとときの安らぎ

上月の民家の救援を終えた班は、2時間ほどで土砂の排除を終え、昆虫館に戻ってきた。

正午前に、昼食休憩とし、ここで車座になり、初めて全メンバーを紹介し合った。

災害がウソのような、緑の山々に囲まれた交流風景。館に植えられたサルスベリが数本、品種によってピンクから赤のグラデーションを見せ、まるで「お花見」のようなひと時を演出した。異なるのは滴る汗と、ずらりと横一列に並んだシャベルだった。

助け、助けられ

午後からは、それぞれの持ち場に戻った。井戸のポンプ室周辺の土砂も掘り起こし、修理が可能になった。この辺りは、土砂ではなく直径数cmから20cmの石が堆積する最大の難所だった。ヘラクレス達の出番だった。

まだ、力の残っている若手を中心に、上流部にあるモンキーパークの附属施設「お猿茶屋」に出動した。名利、瑠璃寺の境内にあり、大江秀謙住職の弟、船越山観光の大江真史社長が経営している。瑠璃寺は長年、県に昆虫館の敷地を無償で貸与してきた。そして児童民生委員でもある大江住職は、阪神淡路大震災以降、ボランティアが主催する「ふれあいキャンプ」に賛同。被災児童たちに宿坊を提供し、自然の中での癒しを願ってきた。このキャンプが、1月17日に神戸市内各地で灯す、「竹灯籠」の活動へと発展したという。今も、佐用町内の多くの竹が神戸へと届けられている。

今度は、その瑠璃寺が被災した。本坊に続く2つの橋が破



何とも頼もしい人海戦術だった



人の輪が、新たな何かを生んだ(岡本俊治理事撮影)

壊され、敷地の一部が流出。せめてものお礼にと、二十数人で茶屋と周辺の土砂を排除し、高圧洗浄機で壁や床の泥を落としました。

その返礼にと大江社長が、昆虫館前の流木や枯れてしまった木々をチェーンソーで切断してくれた。

夕暮れと共に、全員で記念撮影した。この日、活動したのは53人だった。中には、メール会員や一般の参加者も数人含まれていた。短期間だったが、春からの館の運営が小さな実を結んだ。

滋賀県の職員たちが帰っていった。みんなで見送った。震災後に、県外市町から派遣された消防隊員が車を連ねて神戸を後にした、あの日の光景と重なった。再び涙がにじんだ。

滋賀の仲間は、横山にメールを送ってきた。横山は昆虫館のブログに上げた。

T氏

若い職員は、一人一人思うところがあったようです。県民の皆さんのために働くことって、どういうことなのか、考える機会を頂戴することができました。皆さんにお礼を言っていたいただいたこと、皆、本当に感動していました。こういった、助け合いから始まる関係の大切さを改めて感じさせて頂いた次第です。頂いたありがとうを、「ありがとう」で返させて頂きたいと思います。

N氏

流木による家屋の破壊や河道の閉塞に伴う氾濫等の被災時の状況、被災後の復興時の作業の進め方や作業に役立つ道具等、たくさんのことを学ばせていただきました。佐用町の被災現場を目の当たりにして、河川だけでなく荒廃した山林の管理等、減災へ向けて検討すべき課題も多いと感じた一方、昨日の作業のように、今後、土木事業の予算が削減されたとしても、公務員としてできる仕事はたくさんあると感じることができました。

瀧らも別に活動報告をまとめ、多くの教訓を残した。近藤は、この日の報告にこう書いている。

「みなさまのおかげで当面の手作業はほぼ完了し、施設内が乾くのを待つだけの状況になりました。施設全体の土砂排除は残っていますが、これは人力では無理なので、機械の出番を待つだけです」。



お猿茶屋でも一輪車が役立つ



全員集合!

不思議な連鎖

復旧作業が進んではいたが、やはり、シャベルでは限界があった。土嚢を積み、再流入を防ぐのがやっとだった。そんな折、瑠璃寺の前にある常福院の小紫光善副住職(現住職)と奥様の由香利さんが、同寺も被災していたにもかかわらず「いつも前を通る昆虫館が、砂に埋まっているのは忍びない」と、仲間の若い僧侶に呼びかけてくださった。

「高野山真言宗播磨青年教師会」の20~40歳代の僧侶達。小紫副住職が会長であった。

ちなみに広大な播磨の国には、同宗寺院は約180に上り、青年教師会は「現在の社会生活に見合った宗教伝道」を目指す、45歳までの青年僧の集まりだった。

同宗派の青年僧らが年に一度、2日間にわたって交流する野球大会の日、昆虫館の救出へと、行く先を変更したのだ。瑠璃寺の大江住職とモンキーパークの大江社長が加わった。

8月25日(火)朝、剃髪の25人が結集。ミニユンボ1台と、小、中型のダンプ2台、はじめて機械が入った。翌26日(水)は26人が駆けつけた。

真言宗は山寺が多いだけに、土木作業はたしなみのひとつだそうだ。ミニユンボで大まかに土砂を掘る。次にシャベルですくっては一輪車に。ミニダンプを乗り入れて、板でスロープをつくり、次々と一輪車が坂を駆け上がって荷台に土砂を載せる。最後にダンプが土砂の集積地へと走る。休むこともなく、諸肌脱いで競うように汗を流す。

むしの会からは、三木が両日、26日には、三田市にある有



高野山真言宗播磨青年教師会の活動。初めて機械が入った



見事な連携だった。まずシャベルですくう



一輪車で小型ダンプに



青年僧と会員、入り口付近の土砂がなくなっている

馬富士自然学習センターの指導員・中峰空に、刈田、大学院生の安岡、山下と腕に覚えのある会員が参加した。姫路市自然観察の森のレンジャー井内由美は紅一点、佐用駅から折りたたみ自転車で駆けつけ、災害で傷んだ樹木のケアに励んだ。

2日間で館の3分の1ほどの土砂が撤去された。館の外には水没した古いエアコン、扇風機などの電化製品に、石油ストーブ、机、椅子などが、山積みとなった。

僧侶の中には、廃棄した泥まみれのパイプ椅子や錆びたスチール棚を「何かに使える」と持ち帰ってくださる方があった。「もったいない」という言葉が浮かび、捨てるしか能のない自らが恥ずかしかった。

「再開のめど立たず」

1カ月以上、週末に会員たちが交代で作業する日々が続いた。内藤夫妻や近藤、山本、久保、刈田、斎藤、岡田、高橋、金子、横山、井内、三木の常連組、近畿大学元農学部長・杉本毅、千種町の清水、佐用町の小学校教諭・野村智範、そしてひとくはく鈴木、大谷に、ソウムシが専門の沢田佳久の各研究員たちだ。大谷は、ひとくはく連携活動グループ・鳴く虫研究会「きんひばり」の仲間も連れてきた。テネラルでは、大学生の中瀬や院生の安岡、藤原、旭和也たちも奮闘していた。

川の緊急工事が行われ、少し深くなった。それに併せて、川側の土砂を少し取ってもらった。

それでも大量の土砂が、館の北側と氾濫した川沿いとに残っていた。これを取り除かない限り、開館は不可能だ。出水すれば再び埋まってしまう。

ショッキングな見出しが神戸新聞に並んだ。

「昆虫館被災、再開めど立たず」。

最後に歴史がものを言った

「めど立たず」が意外な展開を導いた。造園のプロ、姫路市の仁寿園造園緑地(株)の毛利幸弘代表取締役が動いた。「昆虫館には皆、子どもの時にお世話になった。立ち木が多く、土砂出しは私らにしか出来ん」。

事前調査し、土砂の量を測り、作業に必要な機材と人員を算出。業者仲間の「姫路造園建設業協会」のメンバーに声を掛けた。反対意見がなかったわけではない。だが、米国の日本庭園を整えるなど、ボランティア経験豊かな会だった。期日は9月26、27の両日と決まった。

県昆虫館時代からの40年近い日々培われた、「幼き日の思い出」が彼らを動かした。

大小のコンボ数機、何台ものダンプと土砂を運ぶキャタピラ付きの特殊車両まで持ち込んだ。

昆虫館のフェンスをはずして、大きな鉄板を渡し、やや低い館内に重機を入れた。小型のコンボが2台、館の奥まで入り、少しずつ土砂を取り除いては、反対側に土砂の山を作る。その山を中型のコンボがすくい、運搬用の特殊車両に乗せる。特殊車両は、数m移動して土砂を放り出す。最後に大型コンボが、それを掻き揚げてダンプに乗せる。ダンプが土砂集積場に運ぶ。

段取り通り、小型コンボはショベルのつま先を1cm間隔

で上下させ、また横に振って正確に土砂だけをすくいとった。神業であった。

だが、土砂の搬出ルート上に、あのハリマイノデがあった。土嚢を株の際まで積み重ねて、上から分厚い鉄板を敷いた。イノデは葉一枚、落とさなかった。

その先は人力の出番。当会理事の大塚剛二が篠山から駆けつけるなど、延べ12人が活躍、造園のプロとともに土砂をかいた。学生たちも頑張った。

小さな命の救出劇もあった。池の土砂を上げていた久保が「おおー」と、低い声で叫んだ。底近くから、ニホンイモリを掘り出したのだ。流入した土砂に、なすすべもなかったのだろう。10cm 足らずの黒い体は、皮が骨に張りつき、針金のように細い。だが、生きていた。誰もが、小さな命に励まされた。

姫路造園建設業協会も、延べ24人が奮闘し、膨大な土砂は館の前に積み上げられ、高さ数mの山となった。この時期、土砂集積場は満杯だった。再開への願いが現実のものとなった。

同じ頃、大量の流木は、町の要請でチップ工場に引き取られていった。一台の機械が、大木を切断し、つかみ上げて、トラックに載せた。

思いは通じた

8月23日(日)の合同作業以来、高野山真言宗播磨青年教師会、姫路造園建設業協会と3回にわたって大きな救援活動が続いたが、その度に、昆虫館を管轄する佐用町教育委員会も動いた。学校の再建に走る勝山剛教育長の指示もあって、総務課の福井泉課長、中村剛彰係長らは石灰や消毒用の薬品、シカ除けネットなどのほかに、パンや飲料水も届けてくれた。

うれしい「差し入れ」であった。午前中にアンパンが届くと、午後にはジャムパンが届いた。スポーツドリンクなどは、クーラーボックスに入っていた。英語指導員のアメリカ人、ジョセフ・ライアン・ドゥーリーが運搬役だったりした。町も総動員だった。

三河地区自治会長会の嶋本昭彦会長らは、県会議員や町議会の総務委員長を伴って激励に来てくれた。思えば1年半前、地元も、町も、町議会も昆虫館の閉鎖は決定済みであった。それが竹田らの庵途町長への直訴で急転直下、NPOへの運営委託となった。それだけに、どうなることやらと、いづかっていた人も多かっただろう。だが、ここに来て目の前で必死に土砂と闘っている地元は元より姫路や神戸、大阪など、各地からの人々を見て、誰もが「本気なのだ」と理解してくれた。

昆虫館継承の名乗りを挙げたNPOが、佐用の皆さんに本当の意味で認められた。それが災害で得た最大の収穫だった。

直後に駆けつけた齋藤は「災害はもうごめんや。でも結果的には、災害がなかったら、こう仲良うはならなかった」と話す。虫好きの集まりといっても、大学教授、博物館の研究者、コンサルタントなどの専門家、学生やサラリーマン、自営業者、主婦やリタイヤ組とさまざまだ。初めて顔を合わす人が大半だった。それが、あの復旧作業を通し、互いの考え方や行動パターンまでを知り尽くし、穏やかなスピリットで結びついた。掛け替えのない財産となった。



小型ユンボが狭い場所で同時に作業する



鉄板がイノデを守った



苦闘だったが充実感が残った



流木処理。昆虫のような動きをする万能の機械だった

手作業が残った

晩秋の夕方、館の前を、被災した地元の方が犬を連れて散歩していた。笑っている。日常が戻ってきたのだ。常福院の小紫由香利さんに話すと「ここは誰も亡くならなかったからよ」と教えられた。町内では18人が死亡し、小学生を含む2人が行方不明のままなのだ。忘れてはならない事実だった。

大仕事が終わっても、会員たちによる復旧作業は12月まで続いた。家族会員の内藤千津子の手作りケーキの差し入れは続き、会員による料理も振る舞われた。地元の会員は、収穫した野菜を配った。都市と農村の交流であり、後の特産市へと繋がった。

特に2009年の最終作業日、12月20日(日)は、会員ら20人が集い、春の再開に向けて、年明けからの健闘を誓い合った。清水文美や家族会員の三木幸子に、吉田峰規ら院生、学生8人が一緒だった。

この時期には「復旧から復興へ」の言葉を意識した。窓ガラスを磨き、備品を洗い、より細かな手作業の過程であった。災害の前年、2008年に昆虫館の再開に向けて取り組んだ作業と同じだった。「去年の繰り返しかいな」と苦笑した。

だが、作業内容は変わらなくても、大きな変化があった。昆虫館が2008年3月末に閉館し、翌春の再開段階では、まだ一部に旧昆虫館の雰囲気を残していた。しかし、災害を経て、2010年4月の再々開の時には、全く新しい「佐用町昆虫館」に生まれ変わっていた。

それを可能にしたのが庵途町長の英断と、ひとはくなどが音頭を取り、全国から寄せられた義援金であった。

町も応えてくれた

自治会の進言、視察に来てくれた議員たちの了解もあったのだろうか。庵途町長は災害復旧費として500万円もの予算を組んだ。壊れた擁壁をコンクリートで造り直し、フェンスを設け、建物の内部にペンキを塗る。さらに別会計で町水道を導入する。昆虫館のある船越地区は国の局地激甚災害の指定を受けていない段階であった。町単独予算としての計上であった。NPOの活動に対する何よりの評価であった。

佐用町の中心部は、大打撃を受け、復旧、復興に、膨大な出費が見込まれていた。昆虫館は町立とはいえ、NPOを指定管理者にして、わずか4カ月余り。これを機に廃館もあり得た。それだけに会員誰もがその責任を痛感した。「誰のための、何のための昆虫館か」を意識し、活動に「倫理観」が求められ、より高次へと導かれた。

支援ネットが立ち上がった

復旧作業と同時に「佐用町昆虫館復興支援ネットワーク」が立ち上がった。「復旧」ではなく「復興」を願っての募金。ひとはくが事務局となり、岩槻邦男館長自らが呼び掛け人の筆頭であった。

八木の試算では、館自体の損害は少なくとも800万円に上った。町の予算だけでは足りない。各地の昆虫館や博物館などが、呼び掛け人に名を連ねた。全国からカンパが寄せられた。会員も奔走したが、2010年4月の段階で、予想を超

える200万円近くが寄せられた。実に多くの団体や個人からであった。

さまざまなアイデアが

この義援金によって、昆虫館は多様な改修が可能になった。念願のトイレは、狭かった2つの女子用を1つにして広げ、スライドドアにした。さらに手洗いを移設し間口を広げることで、車椅子での使用が可能になった。モルタルの床には樹脂を流し、掃除し易く、少しは衛生的な空間に生まれ変わった。外部に足洗い場を設け、蛇口を3個つけた。井戸も新たに配管を埋設し、2カ所の池に配水が可能になった。

ベビールームや廊下、ラボの一部などの塗装が実現し、町予算の不足を埋め、全館が明るい色調に生まれ変わった。薄暗かった2つの廊下には、壁を抜いて、子ども達がくぐる窓を設け、「秘密の出入口」と名づけた。非常用のドアも設け、内部に光が注ぐようにした。破損のひどかった倉庫は、シャッターや戸を取り外し、椅子を置いてテラス風に改良、夏の日差しを遮る空間となった。

備品類では、中型のエアコン2台、換気扇4機、冷蔵庫も石油ストーブも購入することができた。

義援金での補修は、NPOが直接、業者に依頼した。この繋がりが、予想もしない波及効果を生んだ。何度か屋内配線がショートしたが、電話一本で地元の専門業者が飛んで来てくれる。築40年の老朽木造建築の維持管理には欠かせない存在である。

この間、竹田、八木の発案によって佐用町内で「いどうこんちゅうかん」や「出前昆虫教室」を開き、相坂や、豊かな採集歴を持つシニア大の岡本らが小学校や幼稚園に出向いて、虫の楽しさや素晴らしさを話した。

新たな年に

2010年は雪解けを待って2月7日から作業再開。オープンは4月3日(土)と決まった。3月いっぱい、週末ごとに館内を整理し、標本などの展示を進める。

展示責任者になったチョウの専門家高橋と岡本を中心に、シニア大の面々、片岡義方、桜井正臣、竹川應仁、平木道夫は、水損した3台の木製展示台(幅0.9m、横1.8、高さ1.8m)を修復。ベニヤ板を張り替えて、塗り直した。水野辰彦や芳川は太い竹を割って花壇の境界を作り、チョウの幼虫が食べる植物を移植するなど、春に向けた作業に当たった。

標本も寄せられた。種類ごとに区切って、分かりやすい展示にし、外国産のコーナーも。新設された佐用町のコーナーには、チョウや甲虫類が並んだ。芳川は小学生だった60年前に東京で作った標本を持ち込んだ。

屋外では、土砂に埋まった貴重な植物の再生に力を入れた。太さ10cm、長さ2mほどの流木を何本も横に並べ、2段に積む。それを杉の枝で作った杭で固定して、花壇に整える。伸びるに任せていた樹木は、上部の枝を払い、一部は伐採した。

表土が流出した野草園は土砂や小石を除き、周囲を直径15~20cmの石で囲んだ。佐用町には近畿農産資材という園芸用土の専門店がある。「昆虫館になら」と格安で提供してく



重労働だったが、ロータリークラブならではの和やかな光景も



石や土砂を完全に入れ替えた

れた。石ばかりの部分を持ち上げて、良質な土に入れ替えることが出来た。

三田ロータリークラブの嶋田晴忠会長はじめ10人が、まる一日、大きな石や土砂の入れ替えに汗を流したのも、この時期だった。専門的な知識を持つメンバーがいた。

三連池は流入した土砂を排出し、新たに石や川砂を入れて深さを調節、町内に分布する親水植物を植え、メダカやニホンイモリを放した。館の周囲に巡らされた排水路も2カ所で堰き止めて、魚類やエビ、カニ、水棲昆虫などのビオトープとした。タガメが2度、飛来した。斎藤や安岡、山下が中心になった。

NPOに2年間、計100万円を助成した花王は、東京から社会貢献プログラムの相澤麻希子担当と事業のパートナーである市民社会創造ファンドの神山邦子プログラム・オフィサーの2人を館に派遣。全国の市民活動の仲間に、昆虫館の活動が伝わった。

すべては出会いから

テネラルの中瀬ら大学生が相変わらず活躍していた。鳥取大学の中田康隆らも加わり、奉仕活動を続けた。園庭に2カ所、幅、深さとも40~60cmの溝がある。上流から流れてきた厚い板を利用して橋にした。流失した瑠璃寺の橋板だったのだろう。

数人が作業に当たった。指揮を取るのは72歳の杉本、ショベルを握るのは春から近畿大学農学部で学ぶ18歳の安達誠文。



明日に架ける橋

キャンパスでは交わることがなかった2人が、昆虫館で出会った。安達は、斎藤と同じ中学校の出身だったりした。

作業に明け暮れた会員に、初めての子どもが生まれた。会員と、会員の娘が出会い、結ばれた。岡田はデートに代えて、彼女とともに作業に当たったが、無事ゴールイン。挙式に招かれた三木は、そのエピソードを披露した。

3月に入ると、最初にフクジュソウが咲いた。40cmを超す洪水砂に覆われ、小型コンボとシャベルで土砂を除けた部分だ。大地は生きていた。

あの豪雨から8カ月、作業日は52日に上った。50人延べ266人のNPO会員(学生含む)と、119人延べ163人の協力者、合わせて429人の汗が、希望を現実に変えた。

こどもとむしの会という、一寸の「虫」を介した集まりが、新たな縁(えにし)を紡ぎ、確かな有機体へと変貌していった。

時は巡る

2010年春、再々開。

新たに金子を中心に「こども昆虫道場」を開き、月に一度、子ども達に本格的な指導を始めるなど充実させた。館の運営には、スプリング8でタンパク質の研究をする清水哲哉や、教育者の八田康弘らが新たな力を発揮した。学校単位の訪問もあり、10月末までに、5000人近くが来館。

夏には、災害を乗り越え、昆虫館で育つ少年、あの「るり坊」大江峻弘君を主人公にしたドキュメンタリー・にっぽん紀行「ファールたちの夏」が、NHKで全国放送された。神戸放送局・反町聡ディレクターの渾身の一作だった。佐用町昆虫館は「命の教育の場」としても、注目された。

かつて、瑠璃寺の広大な山域が、殺生禁止となったことから、多様な動植物、さまざまな命の形が守られてきた船越山。その懐に抱かれた小さな昆虫館ならではの特色である。

今、館は落ち葉で埋まり、雪が積もり始めた。氾濫を起こした寺谷川では、本格的な復旧工事が進んでいる。2011年の春に向け、休館中も会員達の作業が続いている。過去と同じものと、新たな挑戦と。3年目の大いなる飛躍を目指して。

(文・写真 NPO法人こどもとむしの会 副理事長・三木 進 2010年12月)

復興義援金会計収支報告

佐用町昆虫館の復旧に要した経費は、全体で約 800 万円であった。うち 500 万円は、佐用町による外構等の工事費で、その他の 300 万円のうち 200 万円強が義援金による支出、100 万円弱が NPO 法人こどもとむしの会会計か

らの支出であった。

当初、義援金は全額佐用町に寄付することとしていたが、佐用町からの要望により NPO 法人こどもとむしの会が執行することとなった。

義援金等の収支の詳細および内訳は以下のとおりである。

佐用町昆虫館復興義援金 会計			NPO 法人こどもとむしの会 災害復旧事業会計			
	科目	金額 (円)		科目	金額 (円)	
【収入】	佐用町昆虫館復興義援金	2,098,133	【収入】	佐用町昆虫館会計から	62,190	
	佐用町台風災害義援金 (昆虫館支援特定分)	57,000		一般会計から	916,669	
	むしの会会計から	1,663				
	受取利息	89				
	収入合計	2,156,885		収入合計	978,859	
【支出】	外注工事費	1,376,550	【支出】	消耗品費	47,036	
	備品費	382,849		旅費交通費	924,800	
	消耗品費	395,526		支払手数料	5,280	
	支払手数料	1,960		通信費	80	
				義援金会計へ	1,663	
	支出合計	2,156,885	支出合計	978,859		
	収支差額	0	収支差額	0		

・いどうこんちゅうかん、開館直前の準備作業にかかる、佐用町昆虫館会計からの支出は、ここに含みません。
 ・義援金募集チラシ 2 万部の制作費 ((株) アム・プロモーション、(有) アイツーアソシエイツによる寄付)、チラシ等の郵送費および募金箱の購入費 (兵庫県立人と自然の博物館による支出) は、ここに含みません。

外注工事費、備品費、消耗品費の支出内訳

科目	物品等	摘要	金額 (円)
外注工事費	エアコン	三菱エアコン 14 畳用、10 畳用 (取り付け作業込)	337,500
	ドア、窓工事	勝手口ドア設置、ガラス窓加工	155,000
	網戸設置	ベビールーム網戸設置等	71,000
	トイレ整備	便器撤去、スライド式ドア設置、床・内壁塗装	346,600
	手洗い場設置	手洗い・足洗い場の設置、配管工事	135,000
	内装工事	準備室間仕切り撤去、天井・壁塗装、床モルタル張り	165,900
	諸経費・消費税		165,550
	合計		1,376,550
備品費	テーブル、イス	UCHIDA センタースタックテーブル CE-1845 型 6 本、ミーティングチェアスツール MS-4 型 12 脚	206,115
	物置き	イナバ物置 ネクスタ (幅 :263cm、奥行 :95cm、高さ :207.5cm)	112,400
	冷蔵庫	サンヨー 2 ドアノンフロン冷蔵庫 (廃棄料込)	64,334
合計		382,849	
消耗品費	植栽関連	肥料、レンガ、植物 (ブッドレア等)	75,490
	清掃・作業用品	ケルヒャー高圧洗浄機 K-2.99M-6、延長ホース 10m	30,902
		ケルヒャー家庭用乾湿両用クリーナー A2701、エコフィルター	17,957
		ホースリール、一輪車のタイヤ、ポリ袋、軍手、水、ノコギリ、クギ、ペンキ、ハケ等	51,348
	玄関マット等	玄関マット、ベビールームカーペット	83,488
	換気扇	換気扇 4 台 (取付け作業込)	23,412
	ストーブ	コロナ石油ストーブ SL-66B(W)、送風機	22,268
	収納ケース	無印良品 ポリプロピレン収納ケース引出式各種	56,020
	展示用物品	フォト光沢ロール紙、インク、のり、はさみ	24,677
		プラスチックケース、のりパネ等 (佐用町台風災害義援金分：町執行)	57,000
	合計		442,562

協力者・支援者一覧

災害の発生から昆虫館再開までの236日間で、復旧作業には169名、429人日が当たった。

復興支援ネットワークへの賛同者は96人・団体で、賛同者からの呼びかけ、個人、団体からの寄付、各種イベントでの募金活動により、義援金は142人・団体から、総額2,098,133円となった。

さらに、物品の寄付や専門的役務の提供など、多くの方々のご協力によって、昆虫館の再開が果たされた。ここに協力者氏名を記し、厚くお礼を申し上げる。

復旧作業協力者

千種川圏域清流づくり委員会・兵庫の川サミット連絡会関係者

池田 剛康
池田 幸恵
井関 明子
伊藤 聖晃
井上 英俊
上原 学
岡田 国秀
瀧 健太郎
竹川 英文
竹本 早苗
田中 康博
辻 光浩
中西 宣敬
八田 久仁
浜野 直樹
久村 尚幸
平谷 聖
深水 正和
前田 晴美
松尾 富貴
村上 修
村田 葵
山路 治世
山路 正一
山本 一潔

高野山真言宗播磨青年教師会関係者

明井 教行
浅田 覚道
朝野 潤建
阿曾 慎也

新 弘正
井上 寛照
今井 隆昭
井村 正応
上田 実聖
岡本 普雅
片山 弘章
金持 智博
亀田 清隆
倉本 哲光
桑山 聖淳
後藤 友栄
小松 真典
小紫 光善
佐藤 俊樹
芝田 玄穹
高倉 弘周
多門 高宣
中谷 昌善
中谷 宥善
中山 祐昭
中山 龍尚
原有 正
平田 秀弘
藤原 秀光
松元 隆正
光井 暎隆
光井 裕二
森本 光紹
弓削 榮真

姫路造園建設業協会関係者

飯塚 武佳
磯田 博世
石見 治彦
大北 望
亀山 昌慈
熊田 智
杉本 政隆
杉本 正仁
高尾 尚幸
中川 慎也
中村 宏
早川 徹
林 幹夫
藤原 正彦
毛利 幸弘
山崎 大輔

三田ロータリークラブ

嶋田 晴忠

今垣 均
川原 謙
搦本 武雄
西省 造
古家 高
道遊 康浩
森上 明
吉岡 猛
脇田 昌和

瑠璃寺・船越山観光(株)

大江 秀謙
大江 千賀
大江 峻弘
大江 はるか
大江 真史

NPO 法人シニア自然大学校

小田 孝義
小林 弘明
斉藤 隆
平木 道夫

鳴く虫研究会きんひばり

井原 敏明
岩崎 博子
薦田 佳朗
高田 要
三木 くに枝

NPO 法人こどもとむしの会関係者等

大元 和行
櫻井 厚司
松下 泉
森川 恒光
家氏 章
井上 裕士
大嶋 通弘
岡田 かおり
竹田 悦子
竹田 野土香
竹田 山原楽
徳平 明美
徳平 拓朗
徳平 桃奈
富永 達三
長尾 将
中田 康隆
長場 義樹
山本 勇
吉益 美奈子

NPO 法人子どもとむしの会正会員・学生会員

相坂 耕作
 旭 和也
 東 輝弥
 安達 誠文
 井内 由美
 内海 功一
 占部 智史
 大谷 剛
 岡田 浩司
 岡本 俊治
 奥村 達夫
 小倉 滋
 片岡 義方
 金子 留美子
 刈田 悟史
 久保 弘幸
 小西 真弓
 近藤 伸一
 斎藤 泰彦
 桜井 正臣
 沢田 佳久
 茂山 憲史
 清水 文美
 清水 兼男
 清水 一陽
 杉本 毅
 鈴木 武
 高橋 耕二
 竹川 應仁
 竹田 真木生
 内藤 親彦
 内藤 千津子
 中瀬 大地
 中谷 康弘
 中峰 空
 野村 智範
 藤原 淳一
 前藤 薫
 三木 幸子
 三木 進
 水野 辰彦
 森野 光太郎
 八木 剛
 安岡 拓郎
 山下 大輔
 山本 勝也
 横山 正
 芳川 雅美
 吉田 浩史

吉田 峰規
 吉水 敏城

義援金支援者

(五十音順：**** 20 万円以上、*** 10 万円以上、** 5 万円以上、* 3 万円以上)

青木 隆
 芥川緑地資料館
 明尾 正昭
 芦田 英機
 石田 千香子
 板野 隆
 伊丹市昆虫館
 「いどうこんちゅうかん」来場者(三木山森林公園)
 ミュージアムパーク茨城県自然博物館
 いひほ学研究会
 岩井 大輔
 植田 義輔
 宇野 彰
 梅本 定雄
 ウラベ イタル
 ACE-Etp & Pretties
 大久保邦子
 大阪市立自然史博物館・NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワーク
 太田 慶子
 尾崎 文
 *** 小林聖心女子学院 46 回生有志
 帯匠洛都 田中淳也
 垣谷 江里子
 橿原市昆虫館来館者
 狩山 俊悟
 川がきクラブ
 川上 靖
 河野 直子
 関西大学有志一同
 キタザワ テツヤ
 北須磨自然観察クラブ
 北之坊 駿司
 九州国立博物館ボランティア
 「第 3 回近畿子供の水辺交流会」参加者
 国崎クリーンセンター啓発施設
 久保 弘幸
 栗田 澄江
 栗原 祐司
 群馬県立ぐんま昆虫の森
 神戸大学職員一同
 *** 蜂友会(神戸大学農学部昆虫学研究室同窓会)

*「神戸元町・夏の昆虫館」来場者(アートホール神戸)
 こばと保育園
 小林 俊子
 小松 弥生
 コメタニ ヒロカズ ナオコ
 産栄サービス(株)
 三田市有馬富士自然学習センター
 ** 三田ロータリークラブ有志
 ** 茂山 憲史
 **** NPO 法人シニア自然大学校
 NPO シニア自然大学グリーンフォー
 NPO 法人シニア自然大学コンテンツポラリーアーツ展会場
 柴田 蘭子
 (株) 修成建設コンサルタント
 庄原市立比和自然科学博物館
 常福院 小紫光善
 白石 嘉子
 NPO 法人吹田環境学習協会 ちきゅう組
 神戸市須磨区役所職員有志
 *「須磨 G3 自然環境サミット」参加者(すまいるプラザ大黒)
 関 亜希子
 摂津市立三宅柳田小学校 α 共室
 ソラードの会
 胎内昆虫の家
 たつの市立龍野歴史文化資料館
 谷田 昌也
 谷野 紀子
 谷野 温
 *** (匿名希望)
 筒井 義幸
 十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ
 とちぎ昆虫愛好会
 中川 厚子
 中島 宏一
 長島 聖大
 中西 收
 中村 匠吾
 *名古屋城外堀ヒメボタルを受け継ぐ者たち
 *灘浜サイエンススクエア
 西尾 卓
 西川 勝
 *** (匿名希望)
 日本昆虫学会近畿支部 2009 年度大会・日本鱗翅学会近畿支部第 139 回例会」参加者
 野村 智範
 畑中 熙
 ハマダ キヨヒト

濱田 昌司
 林 信一
 林 麻美
 原田 一二三
 原 征宏
 伴 信彦
 NPO 法人 人と自然の会
 「ひとほくフェスティバル 2009」来場者 (兵庫
 県立人と自然の博物館)
 日比 伸子
 姫路科学館
 姫路市立水族館
 * 姫ボタルまつり実行委員会 (丹波市山南町)
 ひょうご環境体験館
 財団法人兵庫県学校厚生会
 * 財団法人兵庫県学校厚生会
 兵庫県高校教員 摂津を歩く会
 兵庫県生物学会 理事役員会
 兵庫県立考古博物館
 ** 兵庫県立人と自然の博物館
 ひょうごサイエンスフォーラム 2009 出席者
 (ひょうごサイエンスクロスオーバーネット)
 兵庫陶芸美術館
 氷ノ山自然ふれあい館 響の森
 広島市森林公園昆虫館
 フジイ カヤコ
 藤本 嘉男
 ** フマキラー (株)
 いきいき学舎・フレミラ 環境・自然コース
 「わっしょいフレミラ秋まつり」来場者
 株式会社文一総合出版
 前原 繁仁
 牧田 習・牧田 更
 正林 智幸
 正保 吉晴
 枘田 和則
 ** 三木自然愛好研究会
 みてやま学園
 南山田地区写真同好会
 宮武 頼夫
 ミヤノ ヒロマサ
 第 5 回「みやまあかね祭」来場者 (宝塚ゴルフ場)
 武庫川ネットワーク武庫川治水を考える連絡協
 議会
 森 勝敬
 守家 通広
 *** モンベルクラブ・ファン
 柳沼 薫
 矢島 稔
 * NPO 法人野生生物を調査研究する会
 山崎 芳恵

山本 勇
 和歌山県立自然博物館職員一同
 渡辺 庸子
物品支援等
 (株) アム・プロモーション 復興義援金チ
 ラ印刷 (20,000 部)
 (有) アイツアソシエイツ 復興義援金チ
 ラシデザイン
 (株) 内田洋行 テーブル・イス値引販売
 バードウィング 昆虫キーホルダー・ピンバ
 ヌ
 イカリ消毒 (株) 兵庫営業所 消毒剤散布
 近畿農産資材 (株) 昆虫飼育ケース
 河野 甲 (レーザーワーク作家) 昆虫ペーパーウ
 ェイト
 三河地区自治会会長・船越自治会 物心両面
 花王 (株) 花王・コミュニティ・ミュージア
 ムプログラム 2009 の助成によりガチャポ
 ン機を購入、義援金募集に活用した

2009 佐用町昆虫館復興支援ネット ワーク賛同者

兵庫県立人と自然の博物館/NPO 法人こどもと
 むしの会/船越自治会長 吉田 昇/佐用郡連合
 自治会副会長・三河地区連合自治会長 嶋本昭彦
 /赤松の郷昆虫文化館/兵庫県立西はりま天文
 台公園/(株)アム・プロモーション/シーアイ
 エー (株)/(有)アイツアソシエイツ/(有)む
 し社/千種川圏域清流づくり委員会/神戸大学
 農学部昆虫科学研究室/兵庫県生物学会/姫路
 市自然観察の森/芥川緑地資料館(あくあびあ
 芥川)/鳥取県立博物館/財団法人 大原美術館
 /貝塚市立自然遊学館/胎内昆虫の家/フマキ
 ラー株式会社/NPO 法人シニア自然大学校/多
 賀町立博物館/文化庁文化財部美術学芸課長 栗
 原祐司/国崎クリーンセンター啓発施設/大阪
 府営箕面公園昆虫館/北須磨自然観察クラブ
 /run ♪ run ♪ plaza/須磨離宮公園/ふくしま
 森の科学体験センター(ムシテックワールド)/
 NPO 法人 人と自然の会/姫路科学館/神戸市
 立青少年科学館/大阪市立自然史博物館/イカ
 リ消毒株式会社/環境科学株式会社/財団法人
 日本博物館協会/西宮市貝類館/兵庫県立考古
 博物館/氷ノ山自然ふれあい館 響の森/広島市
 森林公園こんちゅう館/全国科学博物館協議会
 /伊丹市昆虫館/日本ハンザキ研究所/九州国
 立博物館/日本科学未来館/全国科学館連携協
 議会/ビバ!ニュータウン/神戸山手大学/兵
 庫県ボランティア協会/(株)モンベル/たつの
 市立埋蔵文化財センター/たつの市立龍野歴史

文化資料館/こどもサイエンスひろば(たつの
 市青少年館)/揖保川ふれあい水防センター(赤
 とんぼ文化ホール)/兵庫県立三木山森林公園
 /島根県立宍道湖自然館ゴビウス/宍道湖グリー
 ンパーク/(財)兵庫県学校厚生会/群馬県立ぐ
 んま昆虫の森/沖縄県立博物館・美術館/(財)
 ひょうご環境創造協会/兵庫県立なか・やちよ
 の森公園/(株)内田洋行/ホール・オブ・ホー
 ルズ六甲/六甲高山植物園/兵庫県立有馬富士
 公園/三田市有馬富士自然学習センター/竹野
 スノーケルセンター・ビジターセンター/キッ
 ズプラザ大阪/岸和田市立きしわだ自然資料館
 /灘浜サイエンススクエア/ミュージアムパー
 ク茨城県自然史博物館/アース製薬株式会社/
 兵庫県立六甲山自然保護センター/文一総合出
 版/兵庫県立美術館/兵庫トンボ研究会/倉敷
 市立自然史博物館友の会/十日町市立里山科学
 館「森の学校」キョロロ/昆虫担当学芸員協議
 会/東京都港湾振興協会・東京みなと館/NPO
 法人 西日本自然史系博物館ネットワーク/神戸
 市立森林植物園/群馬県立自然史博物館/兵庫
 陶芸美術館/明石市立天文科学館/北九州市立
 自然史・歴史博物館自然史友の会/須磨 FRS ネット
 /大阪市立自然史博物館友の会/橿原市昆虫
 館/財団法人 柿衛文庫/有限会社 豊中駅前ま
 ちづくり会社/川がきクラブ/兵庫県立歴史博
 物館/三木自然愛好研究会/日本ゾウムシ情報
 ネットワーク

関連資料

佐用町昆虫館の災害と復旧に関する各種資料です。

資料の転載について、各社から格別のご配慮をいただきました。厚くお礼申し上げます。

(各社に無断での記事転載は禁止)

GEKKAN-MUSHI



○佐用町昆虫館、集中豪雨で被災

さる2009年8月9日夜、台風9号の影響による豪雨は、兵庫県佐用町において午後8時からのわずか3時間で179mmの雨量を記録し、佐用町では、死者・行方不明者20人（8月26日現在）もの水害となった。

同町北部に位置する佐用町昆虫館も、そばを流れる川の氾濫、土石流によって大きな被害を受け、敷地は多量の土砂に覆われ、館内は膝下程度まで泥水に満たされた。平山修次郎コレクションはすでに昆虫館になく、会員が持ち寄った標本もほとんどは無事であったが、多くの物品が使用不能となった。再開の目処は立っていない。

本誌460号でお伝えしたように、佐用町昆虫館は、37年間存続した兵庫県昆虫館の廃止の後、よみがえった館である。廃止の報を受けた昆虫学者や博物館関係者が『NPO法人こどもとむしの会』（理事長：内藤親彦・神戸大学名誉教授）を立ち上げ、指定管理者となって、2009年4月に佐用町の施設として再開した。昆虫館は、わずかな予算の中、会員が交代で一日館長をつとめるなど、ボランティアで運営されている。今夏には多くの家族連れを迎え、館の運営に少しずつ手応えを感じはじめていた。その矢先の災害である。

まずは被災された方々の生活が一日も早く復旧するこ

●佐用町昆虫館復興義援金の募集について

佐用町昆虫館の復興支援を目的とした義援金を受け付けています。集まった義援金は、佐用町に寄付し、昆虫館復興に関する事業に活用いただきます。

振込みの場合

- ゆうちょ銀行
振替口座：00940-2-157745
口座名：2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク
- 三井住友銀行フラワータウン出張所（394）普通預金
口座番号：3346833
名義：2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク事務局
八木 剛



昆虫館の正面 柵は壊れ、敷地内は土砂が堆積した（高橋耕二撮影）



標本展示室の泥をかき出す（三木暹撮影）

とを祈るが、その後には、せひとも佐用町昆虫館を復旧、復興させ、再び自然の中で子どもたちの笑顔があふれる館を取り戻したい。

そこで、2009佐用町昆虫館復興支援ネットワークを立ち上げるようになった。呼びかけ人は、岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館館長）、内藤親彦（NPO法人こどもとむしの会理事長）、中瀬勲（兵庫県立人と自然の博

No. 464, Oct. 2009

No. 464, Oct. 2009

物館副館長）である。兵庫県立人と自然の博物館と佐用町昆虫館は、奇しくも被災数時間前の昆虫館で、「運携に関する協定書」への調印を行った。そんな縁である。昆虫館を再開するには、多大な労力とお金がかかることとなるが、再び灯った昆虫館の小さな灯が消えることのないよう、各方面からのご厚情を、よろしくお願ひしたい。

佐用町昆虫館の被災状況についての詳細は、ホームページをご覧ください。http://www.konchukan.net/sayo
(八木 剛)

○編集後記

M 兵庫県の佐用町昆虫館が今年4月に新しい形でスタートを切ったことは、本誌460号の「むしやの広場」でお伝えしました。私も会員になっているのですが、アクセスのよくない地にあり、車の免許のない者にとっては簡単に出かけることができません。週初めに、一日館長を務められた方から送られてくるメールを読み、関係者のご尽力に頭が下がる思いを抱くばかりでした。積極的に館の運営に係わっておられる有志の方々への貢献、昆虫少年・少女を育てるための努力を遠くから眺めながら、ある種の焦りを感じていました。自分も何かしないと……。そう考えていた矢先の悲劇に言葉を失いました。関西では、テレビニュースなどでしばしば佐用町の被災関連のことは報道されていますが、他地域の方々にはあまり情報は届いていないのではないかと思います。せつかく、いい形でスタートした昆虫館です。出来る範囲内で結構ですので、皆様のご支援をよろしくお願ひいたします。（谷角）

それがミュージアムの
原点なのか…

〈緊急レポート〉 水害の試練から立ち上がる佐用町昆虫館

NPO 法人こどもとむしの会・兵庫県立人と自然の博物館研究員 八木 剛



(右上) 災害前の佐用町昆虫館。(その他) 災害直後と復旧作業の様子。敷地は土砂に埋まり、展示室内も泥水に浸された。佐用町昆虫館復興義援金を募集している。くわしくはホームページで。
<http://www.hitohaku.jp/sayo-revival>

本誌 88 号に、「秘密基地としてよみがえった佐用町昆虫館」と題し、財政難、人材難で廃止となった小さな昆虫館を、NPO 法人が指定管理者となってボランティアで運営する試みを紹介した。これが永続的なシステムとなるかは疑問であったため、末尾に「大海原に漕ぎ出した小さな昆虫館に、どんな荒波が待っているのか。今後注目いただきたい。」と結んだ。しかし、早々とやってきた荒波がこのようなものであるとは、いったいそれが予測したのだろうか。

2009 年 4 月に開館した佐用町昆虫館は、徐々に来館者が増え、夏休みに入ると、スタッフは、昼食を取るひまもないと、うれしい悲鳴をあげるようになっていた。来館者とスタッフが対面する館内のレイアウトが功を奏し、生き物を介した自然な会話が生まれ、家族連れのリピーターが口コミで増えていた。そんな手応えを感じていた矢先、8 月 9 日夜の台風 9 号による水害で、昆虫館の敷地は完全に土砂に埋まってしまった。

佐用町昆虫館の指定管理者である NPO 法人こどもとむしの会の会員のほ

とんどは地元在住者ではなく、被害の把握には少々時間を要した。翌 8 月 10 日の午後、勇敢な 3 名の会員が昆虫館に踏み込み、ようやく被災の全貌が明らかとなった。この惨状ではとても開館できない。法人役員が連絡を取り合い、町役場との協議を待たずに、同日夜、「当面の間、休館とする」ことを決定、Web サイトで告知した。

以後、8 月 15 日にかけて、連日、会員が昆虫館に入り、館内の泥水の排除、標本や書籍の運び出しなどの応急措置を行い、住民生活の復旧が何よりも優先、との方針のもと、同様に大きな被害を受けている近隣民家の復旧支援活動を行った。その後、週末ごとに行われた復旧作業には、各方面からの応援部隊も駆けつけてくださり、2 ヶ月近くかけて、館の敷地を覆っていた土砂の大部分は排除された。

偶然であるが、災害当日、8 月 9 日の日中、兵庫県立人と自然の博物館（ひと）と佐用町昆虫館は「連携に関する協定書」に調印し、昆虫館で調印式を行った。協定書はさっそく役に立ち、ひと

に立つこととなった。半月ほどの間に、地元自治会長も含めて全国各地から 95 もの賛同者を得て、義援金募集の案内チラシを作成することができ、住民生活の復旧が一段落した 9 月下旬から、告知を開始した。

10 月に入り、佐用町議会は、応急措置にかかる予算を可決した。いったん廃止が決定していた昆虫館であるから、その復旧は後回しになり、最悪の場合、凍結もあるのではないかと。そんな懸念は杞憂に終わった。会員の献身的な復旧作業、多くの賛同者の声も後押しとなり、行政、議会、地元は、昆虫館の復旧を支持し、再開に向けての動きは、確実なものとなった。

災害は厳しい現実だが、奇しくもわれわれは、地元の方々から、その活動が認められ、信頼されていることを実感できた。復旧作業はまだ途に着いたばかりであるが、周囲の期待に応えるべく、来春の再開をめざして、創造的復興に向け、歩みを進めたい。

(やぎ・つよし)

※表 2、表 3 もご覧ください。

よみがえれ! 「こどもとむしの秘密基地」

——佐用町昆虫館への支援

こどもとむしの秘密基地
佐用町昆虫館

佐用町昆虫館は、兵庫県西部の山あいの町、佐用町に今年4月にオープンしたばかりの昆虫館です。8月に一部を開った台風9号による土石流で深刻な被害を受け現在は休館中ですが、復興を目指し作業を進めています。

※佐用町昆虫館については <http://www.konchukan.net/sayo> をご覧ください。



モンベルクラブ・ファンド

「モンベルクラブファンド」は、モンベルクラブ会員であること自体が自然保護や社会貢献につながる独自の取り組みです。会員1名につき年間50ポイント（ファミリー会員は10ポイント）をファンドに貯め、自然保護や社会福祉、冒険探検などの活動を支援しています。もちろん、お手持ちのポイントをファンドに寄付していただくこともできます。ファンドを通じたこの活動を紹介します。

▼開館から突如の休館へ

「こどもとむしの秘密基地」を合言葉に、米館者にとっても、もてなすスタッフにとってもわくわくする昆虫館を目指し、今年4月にオープンした佐用町昆虫館。予算も少ない小さな博物館ながら、手作りの展示や、スタッフが交代で行う「日館長制」など、NPO法人「こどもとむしの会」が行うユニークな運営で、順調な滑り出しを見せていました。

ところが今年8月、昆虫館を災害が襲いました。佐用町帯の2000棟近い家屋に被害を与えた、台風9号による集中豪雨と、土石流です。池や花壇は一夜にして土砂に埋もれ、施設内の展示もみな泥まみれになりました。開館からわずか5ヶ月目にして、休館を余儀なくされたのです。

スタッフの一人、「兵庫県立人と

自然の博物館」の研究員でもある八木剛さんはそのときの様子をこう語ります。

「呆然としました。ダメだ、これや」という感じで、ただし去年じゃなくて良かった。去年だったらこの昆虫館の計画は廃止にならなうたでしょうから。」

佐用町昆虫館の前身は、昨年3月に財政難により閉館した「兵庫県・千種川グリーンライオン昆虫館」。佐用町昆虫館は、昆虫館の存続を望んだ有志が立ち上げたNPO法人「こどもとむしの会」が自ら運営に当たるという条件で、財政的に苦しい状況のなか生まれ変わった施設なのです。

被災しながらも存続できることを前向きにとらえ、復旧作業は進んでいます。

▼「いどうこんちゅうかん」が始まる

「博物館はどんな規模であ

れ、そこにあることが大事」と考える「こどもとむしの会」のスタッフたち。復旧作業に奔走する一方で、昆虫館に遊びに来られない子どもたちのために新しい取り組みも始めました。

佐用町内の保育園・幼稚園を訪れ、休館中の昆虫館に代わって生きた昆虫との触れ合いを提供する「いどうこんちゅうかん」。そしてスライドショーや標本展示による小学校での授業「出前昆虫教室」です。

昆虫は好奇心を育む最高の遊び相手。蚊帳のなかで生きた昆虫を追いかけ回す園児や、不思議そうに標本に見入る小学生の反応に、子どもたちだけでなく、先生からの評判も上々だといえます。

スタッフの思いと子どもたちの好奇心を支えられながら、佐用町昆虫館は、来年4月の再開を目指します。

モンベルクラブファンドより
佐用町昆虫館復興のため、森保金を寄付いたしました。1日もし早い昆虫館の再開を願っております。

復興義理金のお知らせ

佐用町昆虫館のために「2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク」を通じて義理金を募っています。集まった義理金は、佐用町に寄付し、昆虫館復興に関する事業に活用いただきます。詳しくは <http://www.hitohaku.jp/sayo-revival/> をご覧ください。



幼稚園で行われた「いどうこんちゅうかん」



休館後の昆虫館。敷地は土砂で覆われて

豪雨で浸水、貴重水生生物の池も埋まる



館内は浸水し、貴重な水生生物がいた池も土砂で埋まった。いずれも佐用町撮影

「昆虫館」が休館 再開めど立たず

【佐用】 豪雨による被害を受けた佐用町昆虫館（同町）が、豪雨による被害で休館している。再開めど立たず、貴重水生生物が埋もれた池も土砂で埋まった。再開めど立たず、貴重水生生物が埋もれた池も土砂で埋まった。再開めど立たず、貴重水生生物が埋もれた池も土砂で埋まった。



標本の保管庫も土砂が溜った

運営のNPO法人 近隣住民の復旧優先 ボランティア活動中

昆虫館は、もともと町の施設だったが、豪雨による被害で休館している。再開めど立たず、貴重水生生物が埋もれた池も土砂で埋まった。再開めど立たず、貴重水生生物が埋もれた池も土砂で埋まった。

ボランティア活動中。近隣住民の復旧優先。ボランティア活動中。近隣住民の復旧優先。ボランティア活動中。近隣住民の復旧優先。

神戸新聞 2009年（平成21年）8月20日

豪雨被災 ミツバチ“避難”



スズメバチが襲来 団結し巣守る

佐用町昆虫館 森林公園に飼育の4万匹。豪雨被災、スズメバチが襲来、団結し巣守る。佐用町昆虫館 森林公園に飼育の4万匹。豪雨被災、スズメバチが襲来、団結し巣守る。

神戸新聞 2009年（平成21年）8月28日

豪雨で被災 昆虫館の 児童らに出勤教室

豪雨で被災した昆虫館。児童らに出勤教室。豪雨で被災した昆虫館。児童らに出勤教室。豪雨で被災した昆虫館。児童らに出勤教室。



昆虫館の被災児童らに出勤教室。昆虫館の被災児童らに出勤教室。昆虫館の被災児童らに出勤教室。

神戸新聞 2009年（平成21年）11月12日

8月、連携協定結んだ県立人博

「がんばれ、佐用町」展



佐用町の被災状況を伝えるパネルに集まる女性たち（県立人と自然の博物館で）

豪雨被害・昆虫館再開を応援

台風9号による豪雨で大きな被害の出た佐用町の被災状況などを伝える「がんばれ、佐用町」展が1日、県立人と自然の博物館（三田市弥生が丘）で始まった。豪雨の直前、同町昆虫館と連携協定を結んだ同博物館が、昆虫館の展示再開を支援する取り組みの一環として企画した。同博物館では「来館者に義援金などの協力を呼び掛けた」としている。11月23日まで。

両館は8月9日に資料収集や情報発信などで協力するとした協定を締結。同日夜から10日にかけての大雨で、昆虫館は敷地が土砂で埋まり、床上まで浸水するなど甚大な被害を受けたことから、同博物館が中心となって「昆虫館復興支援ネットワーク」を設立し、自治体などに義援金を募る運

泥につかった昆虫標本など紹介

動を展開している。今回は同博物館実習生らが撮影した写真や、泥につかった昆虫標本など同昆虫館の所蔵物、同館の復旧ドキュメントなどを記したパネルなど11点で被災状況を紹介。今後必要に応じて展示内容を充実させる。見学は、佐用町はじくになった父の古里でもあり、被害の大きさを伝えるにつけ、人ごとは思えませんでした。

読売新聞 2009年（平成21年）10月2日



「がんばれ！佐用町」復興支援展開く

台風9号の豪雨で甚大な被害を受けた佐用町の復興を助ける三田市の県立人と自然の博物館で1日、「がんばれ！佐用町」展が開かれた。復興の歩みと希望を伝える写真パネルや標本など約10点と土砂に埋まったトンネルの標本などを展示している。

人と自然の博物館は8月9日、佐用町で「昆虫館復興支援ネットワーク」が発足し、協定を結んだ。38人の研究者がいる都市型博物館と、自然愛好者らでつくるNPO法人が運営する地域型自然の博物館が、環境教育や生物学習で協力する目的だ。

ところが協定を結んだ9日夜から10日にかけての豪雨で、同町昆虫館は「多くの人が被害を蒙り、同博物館が中心とな

「がんばれ！佐用町」展は11月23日まで。展示は11月23日まで。佐用町昆虫館復興支援ネットワーク。問い合わせは、509・2001。

朝日新聞 2009年（平成21年）10月2日

豪雨被害の現状知って



佐用町の被災状況を紹介したパネルが県立人と自然の博物館

両館は8月9日、佐用町昆虫館と自然・環境分野などで連携協定を締結し、11月23日まで開催される「がんばれ！佐用町」展で被災状況を伝えるパネルなどを展示している。

昆虫館は8月9日、佐用町で「昆虫館復興支援ネットワーク」が発足し、協定を結んだ。38人の研究者がいる都市型博物館と、自然愛好者らでつくるNPO法人が運営する地域型自然の博物館が、環境教育や生物学習で協力する目的だ。

ところが協定を結んだ9日夜から10日にかけての豪雨で、同町昆虫館は「多くの人が被害を蒙り、同博物館が中心とな

佐用町展 復興支援呼び掛け

神戸新聞 2009年（平成21年）10月2日

手づかみ「昆虫採集」に歓声

佐用の被災地に「移動昆虫館」



虫眼鏡で拡大したカブトムシの迫力にワクワクする園児ら＝佐用町佐用

台風9号による水害で被災した佐用町の園児らを元気づけようと、同町昆虫館を管理運営するNPO法人（こどもむし）のメンバー4人が22日、平福保育園と佐用マリア幼稚園を巡回し、「移動昆虫館」を開いた。23日は三河保育園と中安保育園を回ることにしている。昆虫館はこの水害で春まで休館となっていた。

この日は、町内で見つかるトンボやバッタ、コガネムシ、外国産の大きなカブトムシやクワガタムシなど生きた昆虫と、美しい羽のチョウチョやタマムシの標本をそろえて訪問した。園児らはカブトムシやイモリを自由に観察して大興奮。チョウチョやカマキリ、トンボなどを放し飼いにした数籠には、十数人の園児が一度に入って手づかみの「昆虫採集」に歓声を上げていた。佐用マリア幼稚園も先生が寄り添い、こうしたイベントで友達と遊ぶうちに元気になってきたようだ。

朝日新聞 2009年（平成21年）10月23日

博物館 市民が息吹

①

「わ、きれい」。兵庫県佐用町の山あいに、子どもたちの声が響いた。昨年11月中旬、鞆山小学校で開かれた「移動昆虫館」。神戸大学農学部の竹田真木生教授（昆虫学）がスライドや標本を見せながら昆虫の生態などを話す。最後に「今、昆虫館は閉まっているけど、再開したらまた来てください」と呼びかけた。移動昆虫館は10月から町内の幼稚園や小学校を回っている。背景には山の小さな昆虫館を巡る起伏に富んだ物語がある。同町の昆虫館は1971年に兵庫県が開設した。大正、昭和期の昆虫学者平山修次郎氏の数万点の標本や生きた昆虫を展示するユニークな博物館で、年間百数十種類の虫を飼っていた。元館長の内海功一さん（84）が振り返る。財政難や老朽化から県は廃止を決定。譲渡を打診された佐用町も財政難で引き受けず、200

よみがえれ昆虫館



流れ込んだ土砂をかき出すこともむしの会会員（09年8月、兵庫県佐用町の町立昆虫館）

2度の閉鎖 乗り越えて

7年秋に閉鎖が決まった。昆虫館が息を吹き返したのは、同年11月、竹田教授が旧知の兵庫県立人と自然の博物館（同県三田市）主任研究員の八木剛さん（41）にかけた一本の電話がきっかけだった。「何とかならなかった。何とかならんないかね。博物館はどんな規模でも大切にしたいのだが……」。少年時代に三重の博物館や教育関係者、自

然保護グループなどが署名集めに奔走。町の空気は次第に変わっていった。こうして昆虫館は08年10月、佐用町に譲渡され、09年4月、「NPO法人こどもむし」の会を指定管理者に佐用町昆虫館としてよみがえった。①開館は4月10日の土・日・祝日のみ。子どもたちの体験学習を重視。③常勤の館長は置かず「むしの会」会員が交代で詰める―ことにした。家族連れが週末ごとに訪

駆けつけたボランティアは阪神大震災を経験した人も多く、復旧作業はスムーズに進んだ」と、会員の一人で鞆山小学校教諭の野村智範さん（52）が語る。「むしの会」会員は80人に増え、12月末には約20人が参加して大掃除。全国から寄せられた義援金は120万円を超えた。再々オープンは今年4月。「2度の危機を乗り越えた原動力は昆虫館を残したいという市民の思い」と野村さん。京都から訪れた老夫婦は「心配だから、大阪から来た主婦は「子どものころここに来て虫が好きになった」と話したという。「博物館は白衣を着た専門家（学芸員）の調査・研究の場というイメージが強いが、実態は市民に支えられている」。八木さんの言葉は昆虫館の苦闘の軌跡が語るメッセージでもある。

広角鋭角

「会員が連日、泥水をかき出したり標本を運び出したりした。神戸、大阪から自治体の財政難や来館者の減少などで「冬の時代」が続く博物館。市民が息を吹き込んで輝きを放つ博物館を各地に訪ねた。

よみがえれ「秘密基地」

昨年8月の台風、北部豪雨による被害で休館を余儀なくされた佐用町昆虫館(佐用町助郷)が4月3日、再びオープンする。大衆の涙をかみ出し、破壊された建物の改修なく、掘削作業で掘られた砂を片付け、重要なNPO法人(認定NPO)の会館としては「よろも」の会館が「よろも」として作業を担う。(小西康之)



昆虫館はもとも山の麓、善化と街並みで2008年3月末に閉館し、町が壊れた建物を改修せず、掘削作業で掘られた砂を片付け、重要なNPO法人(認定NPO)の会館が「よろも」として作業を担う。(小西康之)



来月3日に再開

イブらの地道な作業と「よろも」の「秘密基地」の復興を期して、町が改修された建物を改修せず、掘削作業で掘られた砂を片付け、重要なNPO法人(認定NPO)の会館が「よろも」として作業を担う。(小西康之)

● 掘削作業を急ぐスタッフら=いずれも佐用町助郷
● 標本を確認するスタッフ

神戸新聞 2010年(平成22年)3月29日

町昆虫館
4月3日から再開
敷地が大量の土砂で埋まり、館内にも泥水が流入し、休館となっていた

町昆虫館ですが、多くの皆さまの応援により、4月3日(土)から再開します。
佐用町の標本コーナーを新設するなど、見事によみがえった昆虫館にぜひ遊びに来てください。



昆虫館の掘削作業の様子

再開記念イベント
「むし開き」を開催
4月4日(日)午前11時から再開記念イベントを開催します。
「昆虫館の歌」を初演とし、「昆虫くすぶ」をみながらつくり出す。
お問い合わせ
お電話 0870-42424
FAX 0870-42424
佐用町昆虫館(町助郷)
〒780-0110 佐用町 1-1-1
http://www.torikun.jp

広報さよう No.54 (2010年3月号)

災害乗り越え 昆虫館が復旧

来月3日開館



人ロウとむし開き会が形をとり、運営、好例をのび出したが、土砂が床に流れ出し、掘削作業で掘られた砂を片付け、重要なNPO法人(認定NPO)の会館が「よろも」として作業を担う。(小西康之)

朝日新聞 2010年(平成22年)3月29日



昆虫館はもとも山の麓、善化と街並みで2008年3月末に閉館し、町が壊れた建物を改修せず、掘削作業で掘られた砂を片付け、重要なNPO法人(認定NPO)の会館が「よろも」として作業を担う。(小西康之)

毎日新聞 2010年(平成22年)4月3日

佐用町豪雨被害

昆虫館8か月ぶり再開

スタッフ休日返上で復旧作業

昨年8月の台風9号による豪雨被害で、休館していた佐用町助郷の町昆虫館が、今年8月1日より再開した。珍しい昆虫標本が見られる展示室や、多くの昆虫が集まった庭は土砂にまみれたが、休日返上で復旧作業を続けたスタッフの力で再開し、再開した。



展示室に標本をかけるスタッフら(佐用町昆虫館)

同法人副理事長の三木進さんは「館内が泥だらけになり、スタッフの情熱で再開できた。これまで、きつかったエナジーを存分に発揮し、これを乗り越えたい」と話している。

同館は、昆虫学者・平山水で床土砂約20センチまで泥水。昆虫が集まる庭や池は土砂を洗い、10センチほどに開き、土砂を洗い、休館を余儀なくされた。一時は「再開は難しいのではないか」と懸念する声も聞かれたが、NPOのスタッフは「温気でカビが生えないように」と標本の100ケースを手分けして自宅に持ち帰り、土、日曜日や祝日は、土砂や泥水を除去作業を続けてきた。計約30日かけてパネルや標本

佐用町昆虫館 きょう再開

8カ月ぶり「あす」むし開き

昨年8月の台風9号による豪雨被害で休館していた佐用町昆虫館が、今年8月1日より再開した。珍しい昆虫標本が見られる展示室や、多くの昆虫が集まった庭は土砂にまみれたが、休日返上で復旧作業を続けたスタッフの力で再開し、再開した。

【小泉裕之】

読売新聞 2010年(平成22年)4月7日



神戸新聞 2010年(平成22年)8月4日



朝日新聞 2010年(平成22年)10月30日

2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク 規約

(目的と設置)

平成 21 年 8 月 9 日夜から 10 日未明にかけての集中豪雨により、佐用町一帯は未曾有の災害に見舞われた。NPO 法人こどもとむしの会によって再生した佐用町昆虫館も大きな被害を受け、厚い土砂に覆われてしまった。二次災害も予想される中、現状把握も困難で、再建するには時間と労力がどれほどかかるか予想できない状況である。

当然のことながら地域住民の生活再建が急務であり、昆虫館の復旧には時間がかかることが予想され、十分な予算も期待できるかわからない。市民グループ手作りの小規模な博物館を多くの博物館等が少しずつでも、資金・物資・人材面で協力して応援することが求められるところである。そこで、兵庫県立人と自然の博物館が事務局となり、佐用町昆虫館復興のために資金・物資・人材面で支援を募ることを目的に「佐用町昆虫館復興支援ネットワーク」を立ち上げる。

(所在地)

2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク
〒 669-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目 兵庫県立人と自然の博物館内
TEL 079-559-2001
FAX 079-559-2007

(構成員)

兵庫県立人と自然の博物館 館長 岩槻 邦男 (代表)
NPO 法人こどもとむしの会理事長 内藤 親彦
兵庫県立人と自然の博物館 副館長 中瀬 勲
兵庫県立人と自然の博物館 研究員 藤本 真里・八木 剛 (事務局)

(事業内容)

- 1 佐用町昆虫館復興義援金の募集および受け入れ
- 2 什器、博物館備品等、昆虫館に必要なものの募集および受け入れ

(解散)

2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワークは十分な復興のための支援を実施したと構成員が判断した時点で解散する。

本規約は平成 21 年 8 月 20 日から施行する。

2009年8月の台風9号による 集中豪雨で大きな被害を受けた 佐用町昆虫館さようちょうの復興にご支援を!



▲(写真上) 土砂に覆われた昆虫館の敷地。厚いところでは1mに達した。
(写真下) 道が川となって舗装が浮き上がった昆虫館前。

こどもとむしの「秘密基地」
よみがえっていた佐用町昆虫館を
ふたたび…。

兵庫県の西端にある佐用町昆虫館は、敷地面積942㎡、延べ床面積165㎡の、とても小さな館です。37年間存続した兵庫県昆虫館が廃止された後、佐用町に施設が譲渡され、2009年4月にNPO法人こどもとむしの会が指定管理者となって、「こどもとむしの秘密基地」を合い言葉に、新たに開館しました。昆虫館は4月から10月の土日祝日のみの開館で、会員が交代で一日館長をとめるなど、ボランティアで運営されています。今夏には多くの家族連れを迎え、元気な声がひびき、賑わいをみせていました。そんな矢先の災害となりました。

※昆虫館についての詳細はホームページ
(<http://www.konchukan.net/sayo/>)を、
再生の経緯は「Musée, vol.88」を参照ください。



▲被災前のようす



また、行きたいね こんちゅうかん。むしさん まってて!!



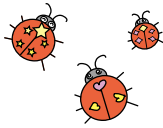
趣旨

さる2009年8月9日夜、台風9号の影響による豪雨は、兵庫県佐用町において午後8時からのわずか3時間で179mmの雨量を記録し、佐用町では、死者・行方不明者20人(8月26日現在)もの犠牲者が出ました。亡くなられた方々には謹んでお悔やみ申し上げます。

同町北部に位置する佐用町昆虫館も、そばを流れる川の氾濫、土石流によって大きな被害を受けました。敷地は多量の土砂に覆われ、館内は膝下程度まで浸水し、多くの物品が使用不能となりました。

まずは被災された方々の生活が一日も早く復旧するよう、われわれも支援します。そのうえで、ぜひとも佐用町昆虫館を復旧、復興させ、再び自然の中で子どもたちの笑顔がふれる館を取り戻すことができればと考えます。

たとえ小さな存在であっても、ミュージアムは、子どもたちを元気づけ、社会を明るくすることに役立つものであると、私たちは信じます。再び灯った昆虫館の小さな灯が消えることのないよう、みなさまのご厚情を、よろしくお願いいたします。



2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク

呼びかけ人

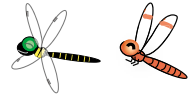
岩槻邦男(兵庫県立人と自然の博物館館長)

内藤親彦(NPO法人こどもとむしの会理事長・神戸大学名誉教授)

中瀬 勲(兵庫県立人と自然の博物館副館長)



▲ 標本展示室の泥を排除しています。ボランティアによる支援をいただいています。



賛同者

兵庫県立人と自然の博物館/NPO法人こどもとむしの会/船越自治会長 吉田 昇/佐用郡連合自治会副会長・三河地区連合自治会長 嶋本昭彦/赤松の郷昆虫文化館/兵庫県立西はりま天文台公園/(株)アム・プロモーション/シーアイエー(株)/(有)アイツアソシエイツ/(有)むし社/千種川圏域清流づくり委員会/神戸大学農学部昆虫科学研究室/兵庫県生物学会/姫路市自然観察の森/芥川緑地資料館(あくあびあ芥川)/鳥取県立博物館/(財)大原美術館/貝塚市立自然遊学館/胎内昆虫の家/フマキラー(株)/NPO法人シニア自然大学/多賀町立博物館/文化庁文化財部美術学芸課長 栗原祐司/国崎クリーンセンター啓発施設/大阪府営箕面公園昆虫館/北須磨自然観察クラブ/run♪ plaza/須磨離宮公園/ふくしま森の科学体験センター(ムシテックワールド)/NPO法人人と自然の会/姫路科学館/神戸市立青少年科学館/大阪市立自然史博物館/イカリ消毒(株)/環境科学(株)/(財)日本博物館協会/西宮市貝類館/兵庫県立考古博物館/氷ノ山自然ふれあい館 響の森/広島市森林公園こんちゅう館/全国科学博物館協議会/伊丹市昆虫館/日本ハンザキ研究所/九州国立博物館/日本科学未来館/全国科学館連携協議会/ピバ! ニュータウン/神戸山手大学/兵庫県ボランティア協会/(株)モンベル/ひょうご環境体験館/たつの市立埋蔵文化財センター/たつの市立龍野歴史文化資料館/こどもサイエンスひろば(たつの市青少年館)/揖保川ふれあい水防センター(赤とんぼ文化ホール)/兵庫県立三木山森林公園/島根県立宍道湖自然館ゴビウス/宍道湖グリーンパーク/(財)兵庫県学校厚生会/虹の下水道館/沖縄県立博物館・美術館/(財)ひょうご環境創造協会/兵庫県立なか・やちよの森公園/(株)内田洋行/ホール・オブ・ホールズ六甲/六甲高山植物園/兵庫県立有馬富士公園/三田市有馬富士自然学習センター/竹野スノーケルセンター・ビジターセンター/キッズプラザ大阪/岸和田市立きしわだ自然資料館/灘浜サイエンススクエア/ミュージアムパーク茨城県自然史博物館/アース製薬(株)/兵庫県立六甲山自然保護センター/文一総合出版/兵庫県立美術館/兵庫トンボ研究会/倉敷市立自然史博物館友の会/十日町市立里山科学館「森の学校」キョロロ/昆虫担当学芸員協議会/東京都港湾振興協会・東京みなど館/NPO法人 西日本自然系博物館ネットワーク/神戸市立森林植物園/群馬県立自然史博物館/兵庫陶芸美術館/明石市立天文科学館/北九州市立自然史・歴史博物館自然史友の会/須磨FRSネット/大阪市立自然史博物館友の会/榎原市昆虫館/(財)柿野文庫/(有)豊中駅前まちづくり会社/川がきクラブ/兵庫県立歴史博物館/三木自然愛好研究会/(敬称略、順不同)

ご支援の方法

【佐用町昆虫館復興義援金】 募集期間：2010年3月31日まで

佐用町昆虫館の復興支援を目的とした義援金です。集まった義援金は、佐用町に寄付し、昆虫館復興に関する事業に活用いただきます。支援者名はホームページに掲載させていただきます。

1. 振込みの場合

○ゆうちょ銀行 振替口座 00940-2-157745

口座名：2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク

※振替(ゆうちょ口座からのATM送金)は無料。他行からの振込や窓口での払込みの場合、所定の手数料がかかります。

○三井住友銀行 普通預金 3346833

支店：フラワータウン出張所(店番394)

口座名：2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク 事務局 八木 剛

※通常の振込手数料がかかります。

2. 現金書留の場合

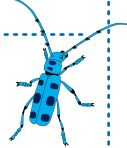
〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目 兵庫県立人と自然の博物館内

2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク事務局

※通常の料金がかかります。

3. 募金箱による場合

兵庫県立人と自然の博物館ほかに募金箱が設置されています。



【佐用町台風災害義援金】 募集期間：当分の間

佐用町の被災者支援ならびに災害復旧を目的とした義援金です。

○ゆうちょ銀行 振替口座 00980-4-601

口座名：佐用町災害対策本部

※コメントに「昆虫館復興支援」と明記すると、昆虫館復興義援金として処理されます。記述がない場合は一般の義援金として処理されます。

※振替(ゆうちょ口座からのATM送金)は無料。ゆうちょ窓口での現金払い込みの場合も、手数料免除されます(2010年2月22日まで)。

※お申し出により、領収書が発行され、寄付金控除の対象となります。

義援金の受け入れ口座はほかにもあります。くわしくは、佐用町のホームページをごらんください。http://www.town.sayo.lg.jp

○佐用町災害対策本部

〒679-5380 兵庫県佐用郡佐用町佐用2611番地1

電話 0790-82-2521 FAX 0790-82-0131

お問い合わせ

2009佐用町昆虫館復興支援ネットワーク

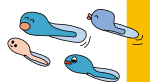
〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目

兵庫県立人と自然の博物館 担当：藤本 真里・八木 剛

電話 079-559-2001 FAX 079-559-2007

E-mail: fujimoto@hitohaku.jp

U R L: http://www.hitohaku.jp





2010年4月、再びよみがえった佐用町昆虫館（東輝弥撮影）

佐用町昆虫館、台風災害と復興の記録

平成21年（2009年）台風9号水害による佐用町昆虫館の被災と復旧、復興に関する記録集

編集・発行者 2009 佐用町昆虫館復興支援ネットワーク

〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目

兵庫県立人と自然の博物館 気付（担当：八木 剛・藤本真里）

発行日 2010年12月25日

印刷・製本 CIA株式会社

※ 本報告書は、平成22年度兵庫県シンクタンク協議会自主研究グループ助成金による研究「小規模ミュージアムにおける災害復興のあり方」の一環として作成しました。